

特集 **新しい潮目を読んで後悔しない1台を!**

パソコン選びの 新潮流

パソコン選びの潮目が変わりました。製品動向や技術動向が激変し、これまでと異なるまったく新しい状況が生まれています。売れ筋のスタンダードノートや出先で使うモバイルノートが劇的な進化を遂げ、コスバ抜群のミニPCが人気を集めるなど市場はすっかり様変わりしました。技術面では次代を担うホープとしてAI(人工知能)パソコンが脚光を浴びています。こうした新潮流をいかに読み切って理想の1台を選ぶか。その道筋をご案内します。

文/五十嵐 俊輔、石坂 勇三、小谷 宏志、滝 伸次、田代 祥吾、原 如宏
イラスト/安ヶ平 正哉

AI対応の
パソコンは
必要か?

潮目の変化を的確に読み、後悔しない製品選びを

【こ】 数年でパソコンはすっかり様変わりした。製品動向や技術動向が目まぐるしく変化し、従来とまったく異なる新しい状況が生まれている。これからパソコンを購入する人は、使用目的を明確にしたうえで、用途に合う製品カテゴリから最適なパソコンを絞り込み、その性能を的確に見極めることが重要だ(図1)。

現在の製品カテゴリは大きく6つに分類できる(図2)。例えば、売れ筋

のスタンダードノートでは、画面サイズが従来の15・6型から16型へと大型化し、同時に重さを1kg台に抑えた軽量の製品が増えている。従来の「据え置き型」から「家中どこでも持ち運べるノート」に変貌を遂げている。

モバイルノートの軽量化にも目を見張るものがある。今や14型ノートが1kgを切るの当たり前。なかには重さ634gのモデルもある。ひと昔前に比べて出先に持ち歩くのが格段に楽

になり、画面が大きいので作業もしやすくなった。一方で、これまでになかった新しいジャンルも登場してきた。ノートパソコンより格段にコストの良い「ミニPC」が人気を集め、急速に市場を広げている。パソコンとタブレットの1台2役を演じる「2in1ノート」も、タッチ操作を好むユーザーに支持されている。ユーザーの使い方の広がりに合わせて、製品カテゴリもますます多様化する傾向にある。

製品動向だけでなく技術動向にも目を向けた。最大の注目点はCPUの構造が激変したことだ。AI(人工知能)処理専用のプロセッサ「NPU」を内蔵するものが登場。マイクロソフトはNPU搭載のパソコンの中から一定の基準を満たす製品を「Copilot+PC」と名付けて普及を図っている。それが、今本当に必要かどうかを見極めることも重要だ。本特集ではそういう点も含めて詳しく解説する。

使用目的を明確にすることが出発点

Step 1 使用目的や利用シーンなどを明確に!

明確にすべきポイントは以下の4つ

- ①使用目的は?
 - ・Officeアプリ活用やネット閲覧が中心
 - ・動画編集やビデオ会議なども快適に
- ②いつどこで使う?
 - ・自宅内だけで使えればOK
 - ・職場や出先にも持ち運びたい
- ③何年使いたい?
 - ・3~5年で十分
 - ・できれば7~10年くらい使いたい
- ④購入予算は?
 - ・10万円以内で収めたい
 - ・20万円以内で収めたい

Step 2 自分の用途にふさわしいカテゴリーは?

現行の製品は多様化しており、以下の6つに分類できる(詳細は左ページを参照)

- ①スタンダードノート
- ②モバイルノート
- ③2in1ノート
- ④ミニPC
- ⑤一体型デスクトップ
- ⑥タワー型デスクトップ

これら6つの中から、自分の目的や利用シーンなどにふさわしいカテゴリーを選ぶ

Step 3 お気に入りの製品の实力を見極める!

お気に入りの製品が見つかったら、性能を正しく見極めたい。以下の3点が性能を把握するための重点項目

- ①CPUはAI対応の時代に入入(P36)
 - ・AI(人工知能)処理専用のプロセッサ「NPU」搭載のパソコンが続々登場。その实力は?
- ②メモリーやストレージも着実に進化(P42)
 - ・メモリーは高速なDDR5が普及へ
 - ・ストレージはPCIe SSDの一択
- ③インタフェースの着目点は?(P45)
 - ・USB端子は形状より速度に注目!
 - ・最新Wi-Fi 7で速度が4倍アップ!

図1 間違いないパソコン選びをするには、パソコンの使用目的と利用シーンを明確にすることが出発点になる。そのうえで、自分の用途にふさわしい製品カテゴリの中からお目当ての1台を絞り込む。さらに、最新の技術動向を踏まえて、その1台の性能を的確に評価する眼力を持つことも不可欠だ

※特集の中で紹介した製品の価格は、いずれも2024年12月上旬時点のもの

6つのカテゴリから用途に合った1台を!

特集 パソコン選びの新潮流

1 **スタンダードノート** P10

16型の大画面で重さ1kg台も



2 **モバイルノート** P16

14型で634g 驚きの軽量機も



3 **2in1ノート** P22

パソコンとタブレットの1台2役



4 **ミニPC** P26

コスパ最高!
ノートより安い

手のひらサイズ



5 **一体型デスクトップ** P30

テレビと兼用できる機種も



6 **タワー型デスクトップ** P32

圧倒的に高性能! 価格も高い

自作する手もあり



図2 現在販売されているパソコンは、大きく6つの製品カテゴリに分類できる。あらゆる用途に幅広く対応できるスタンダードノート、出先での利用に適したモバイルノート、パソコンとタブレットの2役をこなす2in1ノート、抜群のコスパで人気を呼んでいるミニPC、テレビと兼用できる機種が多い一体型デスクトップ、ゲームや動画編集などで威力を発揮するタワー型デスクトップの6つだ

16型が1kg台！作業性と機動性を両立！

自宅や職場内で無理なく持ち運べる

ス タンダードノートパソコン（以下、スタンダードノート）は、パソコンの中で最も売れるカテゴリだ。

特徴は、あらゆる用途に幅広く対応できること。画面サイズが大きく作業しやすいうえ、数字入力用のテンキーを装備。DVDやBlu-ray対応の光学ドライブも内蔵する。このため「全部入り」とか「オールインワン」とも呼ば

れてきた。

そのスタンダードノートが、ここ数年で大きな変貌を遂げている。1つは画面サイズの大型化だ。主流の画面サイズが15.6型から16型へと移行した。数字上は0.4とわずかな差だが、実際に使ってみると16型のほうが断然見やすい（図1）。もう1つが、画面サイズの大型化と

真逆を行く本体の薄型軽量化だ。ひと昔前は、重さが3kg近い製品が主流で本体も分厚かった。今は2kgを下回り、厚さも2cm以下の製品が増えている。このサイズ感なら、自宅や職場内を無理なく持ち運べる。従来のように机の上に据え置き、ACアダプターをつなぎっ放しにする使い方は過去のものになりつつある（図2）。

つまり、最新のスタンダードノートは、画面を大きくして作業性を高めながら、同時に本体の軽量化を推し進めて機動性をアップするという両面作戦を展開している。

光学ドライブを搭載しない機種も少しずつ増えている

では最新スタンダードノートを具体的に見ていこう。NEC、富士通、Dannabook、VAIOという国内ブランドの中から予算20万円という視点

最新スタンダードノートの特徴は？

画面の大きさ／重さ

16型が主流、作業性が向上
重さは1kg台、機動性が向上

利用シーン

自宅や職場の中で無理なく持ち運べる

図1 以前のスタンダードノートパソコン（以下、スタンダードノート）の画面サイズは15.6型が主流だったが、最近は16型が増えている。それでいて重さが2kgを切る機種も多い。自宅や職場内で無理なく持ち運べる重さだ

スタンダードノートのメリットは？

●買い換え時期の機種とは大きな違いが…

7年前のスタンダードノート



- 画面サイズは15.6型
- 2kg台後半の重さ
- 据え置きで使う
- 今は「家中どこでも持ち運び」

●画面は大きくて見やすいほうがいい

スタンダードノート



モバイルノート



モバイルノートは画面が小さいと感じたら、スタンダードノートがお勧め

●テンキーや光学ドライブなどの機能にもこだわる



図2 主なメリットは3つ。1つは画面サイズが大きいこと。2つめは数字を快適に入力できるテンキーを備えていること。そして、光学ドライブを備えた機種が多いこと。ただし、最近は光学ドライブを搭載しない機種も増えている

国内ブランドのお薦めモデルはこれ!

光学ドライブレス化など定番ノートを刷新!



LIFEBOOK PH50/J3

●富士通

実売価格:20万9000円前後

スタイリッシュに刷新された定番ノート

LAVIE N16 N1670/HA

●NEC

実売価格:17万1000円前後



特集

パソコン選びの新潮流

画面サイズ

16型

CPU

Core i5-1235U

メモリー

16GB

ストレージ

256GB

画面サイズ

16型

CPU

Core i7-1255U

メモリー

16GB

ストレージ

256GB

元祖ノートPC「dynabook」の新スタイルノート



dynabook C6 P1C6XPEG

●Dynabook

実売価格:16万5000円前後

VAIOが提案する今どきの定番ノートがこれ

VAIO F16 VJF1618

●VAIO

直販価格:16万9800円



画面サイズ

15.6型

CPU

Core i5-1334U

メモリー

16GB

ストレージ

256GB

画面サイズ

16型

CPU

Core i5-1334U

メモリー

16GB

ストレージ

512GB

図3 国内大手ブランド、4つのお薦めモデルを挙げた。2024年はNECと富士通が16型を投入。特に富士通は、光学ドライブを省いて薄型軽量化した「LIFEBOOK PH」という新シリーズが登場。VAIOは、ほかより早く2023年に16型ノート「F16」を発売。Dynabookは、この中では唯一15.6型のみだが、光学ドライブ搭載、非搭載でシリーズを分けており、「dynabook C」シリーズは光学ドライブレスになる

でお薦め製品を挙げた(図3)。

この中で2024年に大きく進化したのはNECの「LAVIE N16」と富士通の「LIFEBOOK PH」の2シリーズ。どちらもトレンドである16型を採用した新シリーズだ。

ただし、この2つはコンセプトが少し違う。LAVIEは併売する「N15」という15.6型ノートの外観やデザインをほぼ継承しつつ、画面だけ大きくした。「全部入り」というコンセプトを引き継いでいる。

一方、LIFEBOOKのPHは、光学ドライブを省いて軽量化を徹底。従来の全部入りとは一線を画している。ただし、富士通も全部入りの「AH」シリーズも展開しており、選択肢を増やす戦略を取っている。

実は16型のスタンダードノートに道を付けたのはVAIOだった。NECや富士通に先んじて、2023年3月に16型ノートの「F16」を発表。この秋冬商戦でも16型の後継「F16」シリーズをラインアップしている。F16 VJF1618は、512GBのストレージを備えながら17万円を切る価格設定でお買い得だ。

Dynabookは15.6型スタンダードノートとして「T」と「C」の2シリーズを用意する。画面の大きさは少し見劣りするが、光学ドライブの有無でシリーズを分けたのはDynabookが先。最近では、光学ドライブのないCシリーズのほう売れているという。

①縦に広い16型ディスプレイ化に拍車がかかる

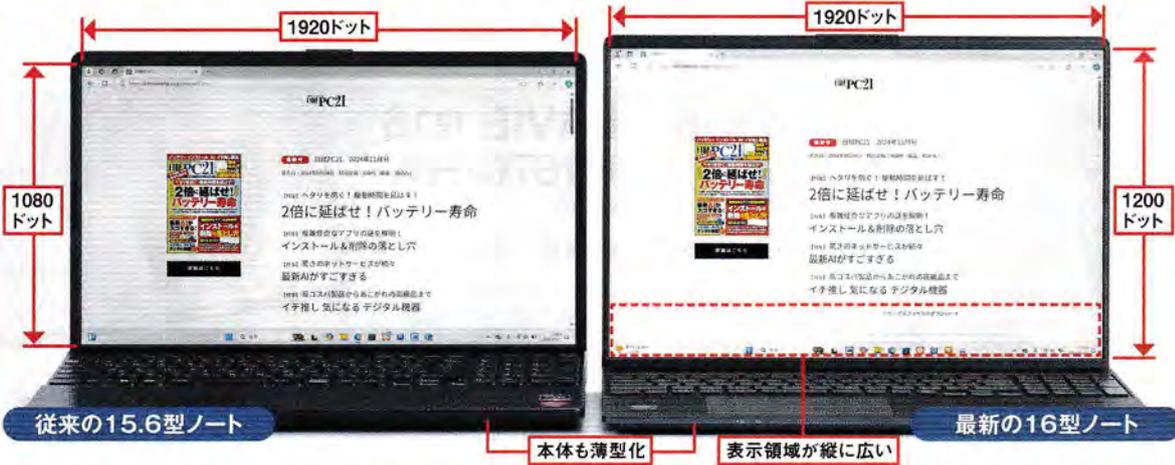


図1 最新機種と古い機種の最大の違いはディスプレイのサイズ。長年15.6型が標準だったが、今後は16型が主流になる。縦横比も16対9から16対10へと縦方向に広がったので、ウェブなどを閲覧しやすくなる

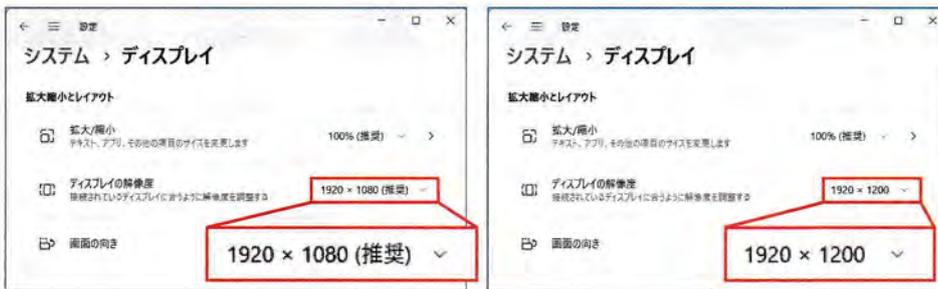


図2 15.6型と16型のディスプレイ設定を比較した。従来の15.6型ノートは1920×1080ドット、16型ノートは1920×1200ドットとなり縦方向に120ドット広い。その分、作業領域が広がる

最

新しい16型ノートは従来の15.6型と、何が違うのか。新旧のスタンダードノートを比べていこう。わかりやすいのはディスプレイだ。実際に横に並べて比較すると、16型のほうが広く感じる(図1)。

その理由は画面の縦横比にある。従来の一般的な15.6型では縦横比が16対9なのに対して、16型は16対10が主流だ。この違いにより、ディスプレイの解像度が1920×1200ドットへ拡大している(図2)。縦方向に120ドット広がったただけだが、ブラウザでウェブページを見たり、Wordの文書やExcelのワークシートを作成したりする際に威力を発揮する。

図1は、ブラウザで本誌の公式ページを開いたところだが、16型のほうが1つの画面に表示される範囲が広い。当然のことだが、1画面の表示領域が広がればページ全体を把握しやすくなり、スクロールする回数も減る。快適さはグッと増す。

光学ドライブは必要か？
搭載機と非搭載機が併存

次は昨今、存在意義を問われ始めている光学ドライブだ(図3)。今や光学ドライブ内蔵のスタンダードノートを販売するのはほぼ国内ブランドのみ。

大手の海外ブランドはなくても支障はない機能と判断し、光学ドライブなしの「ドライブレス」へとすでにシフトしている。国内ブランドでも、ドライブレスの製品が少しずつ増えている状況だ。では、いつまで光学ドライブを搭載するのか？ 国内ブランドのパソコンメーカーのマーケティング担当者に尋ねると「ユーザー調査をすると光学ドライブの利用頻度は確かに減っているが、『ドライブがあると安心』という声も根強い。完全に撤廃するわけにはいかない」といった回答が多い。こうしたメーカーの姿勢を踏まえると、当面は光学ドライブが完全に姿を消すことはなく、搭載機と非搭載機が併存する形が続くそう。

図4に国内ブランドの主なメーカーを対象に、15.6型と16型のディスプレイサイズと、光学ドライブの搭載の有無にどう対応しているかを表にまとめた。NECは15.6型と16型があり、どちらも光学ドライブ付きだ。富士通は16型のみだが光学ドライブの有無を選択可能。Dynabookは15.6型で光学ドライブの有無を選択可能。VAIOは16型の光学ドライブレスだけとなる。

画面サイズ、光学ドライブと並んで重さも大切なポイントだ。最新のスタンダードノートは重くても2kg前後。光学ドライブのないものと1kg台半ばと軽い(図5)。また手に持つてみると軽さだけでなく、本体の薄さにも

[注] LAVIE Direct N15 Slimなど一部に光学ドライブを搭載しないモデルもある

製品動向
スタンダードノート

③2kg以下も! ひと昔前に比べると圧倒的に軽い

富士通「LIFEBOOK AH」



富士通「LIFEBOOK PH」
光学ドライブなし



VAIO「F16」
光学ドライブなし



図5 スタンダードノートの軽量化には目を見張るものがある。古い製品だと2kg台後半は当たり前だったが、最新機種は重くても2kg前後。光学ドライブを搭載しないモデルは2kgを大きく下回る

②光学ドライブは必要か? 利用シーンの再確認を!



DVDとBlu-rayの2種類がある

図3 国内ブランドのスタンダードノートでは、まだ光学ドライブの搭載機を選べる。ここは海外ブランドのスタンダードノートとの大きな違いだが、需要は減退しており国内ブランドでも光学ドライブの非搭載モデルが増えてきている

	東洋の思い通りくりに、仕事に、娯楽に、みんなのやりたいことをこの1台で	ネットショッピングや動画を見たり、きれいな大画面で作業に集中したり
シリーズ	ノートブック Tシリーズ	スタンダードノート Cシリーズ
OS	Windows 11 Home 64ビット Windows 11	Windows 11 Home 64ビット Windows 11
光学ドライブ	ブルーレイディスクドライブ/DVDスーパーマルチドライブ	
メモリ	32GB/16GB	16GB/8GB
ストレージ	1TB SSD/512GB SSD/256GB SSD	512GB SSD/256GB SSD
光学ドライブ	ブルーレイディスクドライブ/DVDスーパーマルチドライブ	-
本体重量	約2.2kg	-

◎画面サイズと光学ドライブ搭載の状況

ブランド(シリーズ)	ディスプレイサイズ	
	15.6型	16型
NEC(N15/N16)	○	○
富士通(PH)	-	○ 光学ドライブなし
富士通(AH)	- ※	○
Dynabook(T)	○	-
Dynabook(C)	○ 光学ドライブなし	-
VAIO(F16)	-	○ 光学ドライブなし

※直販や型落ちモデルはあり

図4 15.6型と16型のディスプレイサイズ、光学ドライブの有無という2つの視点に注目して国内4ブランドの製品を分類した。各社の対応はまちまちなので、自分の活用シーンに合わせて製品選びをする必要がある

特集
パソコン選びの新潮流

目を見張る。カバンに入れるのは難しいが、自宅内なら無理なく持ち運べるサイズ感だ。

モデル差が見えるのはキーボードや端子数など

4つめは入力操作の快適性を大きく左右するキーボード。ここは、ブランドやモデルで差が大きい部分だ。注目目は、キー配列、キーストローク、キーピッチの3点。特にキー配列は、矢印キーやテンキーの使いやすさに注目したい。

例えば、富士通のLIFEBOOK PHでは、矢印キーが一段下がっている。ほかのキーと区別しやすい。文字キーとテンキーの間を少し離しているのも親切だ。小さな工夫だが、操作性は格段に良くなる。逆に記号キーの間に矢印キーを配置しているNECのLAVIE N16のキー配列は独特で、慣れるまで時間がかかるだろう(次ページ図6)。

キーストロークは、キーの打ち心地に関連する部分。好みもあるが、キーストロークが深いほうがしっかりとした感触があり、長時間文字入力しても疲れにくい(図7)。キーピッチは、キーとキーの間隔を示す。フルサイズが19mmとされ、スタンダードノートは18mm台半ばから19mmのものが多い。小型のモバイルノートだと極端に狭いものもあるが、スタンダードノートなら違和感なく使えるはずだ。

周辺機器の接続に使うインタフェー

⑤ インタフェースは「数」「種類」「配置」に注目

LIFEBOOK PH



ブランド (シリーズ)	USB	HDMI	LAN	SDカード スロット	
					USB4
NEC (N16)	左側	-	1	1	-
	右側	-	-	-	-
富士通 (PH)	左側	2	1	-	-
	右側	-	1	-	-
富士通 (AH)	左側	1	1	1	-
	右側	-	1	-	1
Dyna book (C6)	左側	-	1	1	-
	右側	-	-	-	-
VAIO (F16)	左側	-	-	-	1※
	右側	-	1	2	1

※microSDカード

図8 端子の規格と数も進化を感じる部分。特にUSBはType-C対応が当たり前になり、上位規格のUSB4を採用する機種もある。数は最低1つ、LIFEBOOK PH/AHは2つ備えている。LANやSDカードスロットの有無、左右どちらに配置するのかが個性がある

⑥ 顔認証対応ならパソコンへのサインインが簡単

顔認証対応のIRカメラ

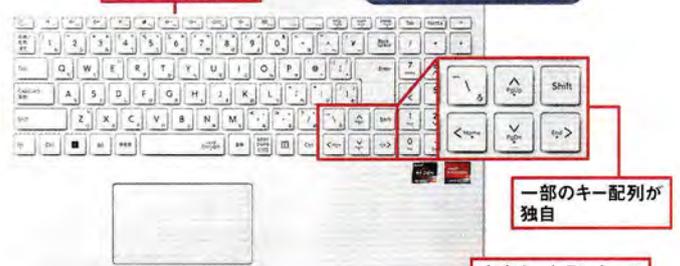


図9 上位機種を中心に、Windows Helloの顔認証に対応したモデルも増えている。自分の顔を登録すれば、パソコンの起動またはスリープからの復帰時にPINコードを入力せずにサインインしたり、パスワードの入力を省略したりできる

④ キーボードの使い勝手には違いがある

デザイン性は良い

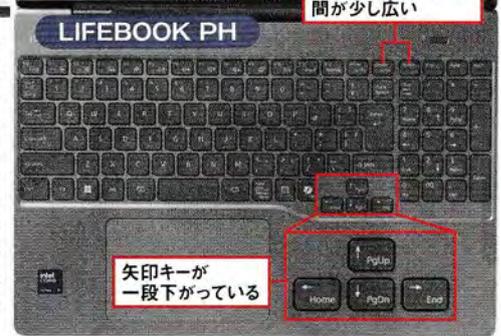
LAVIE N16



一部のキー配列が独自

文字キーとテンキーの間が少し広い

図6 キーボードのキー配列は製品によって異なる。例えば、上に示したLAVIE N16と、右のLIFEBOOK PHを比べると、矢印キーが下がっているかいないか、文字キーとテンキーの間が広いかといった点が異なる



矢印キーが一段下がっている



キーストロークが打ち心地を左右する

図7 キーストロークも差が出る部分。最近では1.5mm程度の浅いものも多く、ベタベタとした打鍵感なので打ちにくい。国内ブランドのスタンダードノートは、1.7mm程度と深めにとり、打ち心地を保っている機種が多い

ブランド (シリーズ)	キーボードの仕様		キー配列	キーの数
	キーピッチ	キーストローク		
NEC (N16)	19mm	1.7mm	△	103キー
富士通 (PH)	18.4mm	1.7mm	◎	106キー
富士通 (AH)	18.4mm	2.5mm	◎	108キー
Dynabook (C)	18.7mm	1.5mm	○	105キー
VAIO (F16)	19mm	1.5mm	○	非公表

ス(端子)も製品による差が大きい部分だ(図8)。USB規格に関しては、現状ではUSB4の搭載機はまだ少数。USB3.2 Gen2 Type-C(10Gbps)とType-Aを合わせて3〜4つ搭載したものが多く、実用的にはこれで十分だ。このほか端子が左右どちらに配置されているかも重要。利用環境によってはケーブルの取り回しがしにくくなるので注意したい。LAN端子やSDカードスロットを装備する機種があるのもスタンダードノートならではだ。最後は最近採用が増えている生体認証。顔や指紋などを使って、サインイン作業を省力化できる(図9)。

コスパ最優先なら海外ブランドがお勧め

海外ブランドなら10万円台でも実用には十分!

NPUを搭載したCore Ultra 5を採用

Pavilion 16-af (インテル)

●HP

直販価格: 10万9800円



画面サイズ	CPU	メモリー	ストレージ
16型 タッチ	Core Ultra 5 125U	16GB	512GB

テンキーが復活したデルの16型ノート

Inspiron 16 5645

●デル

直販価格: 10万9000円



画面サイズ	CPU	メモリー	ストレージ
16型	Ryzen 5 8540U	16GB	512GB

特集

パソコン選びの新潮流

図1 コスパ重視なら海外ブランドの製品がお勧め。10万円台でも最新仕様の機種が手に入る。デルの「Inspiron 16 5645」は、AMDのRyzen 8040シリーズを採用。一時期なくなっていたテンキーも復活した。HPの「Pavilion 16-af (インテル)」は、AI処理用のNPUを搭載したインテルのCore Ultra 5を採用する

15万円出せばさらに高性能なモデルが視野に

上位CPUの13世代Core i9を採用

Vivobook 16 X1605VA

●ASUS

直販価格: 14万9800円



画面サイズ	CPU	メモリー	ストレージ
16型	Core i9-13900H	16GB	1TB

SnapdragonのCPUを採用したCopilot+ PC

ThinkBook 16 Gen 7 Snapdragon

●レノボ

直販価格: 12万9800円



画面サイズ	CPU	メモリー	ストレージ
16型	Snapdragon X Plus X1P-42-100	16GB	512GB

図2 予算を15万円に上げると、高性能な最新機種に手が届く。レノボの「ThinkBook 16」は「Copilot+ PC」というマイクロソフトが提唱するAIパソコンの基準を満たす。ASUSの「Vivobook 16」は、インテルのCore i9-13900Hという通常電力版の高性能CPUを採用する

予 算を抑えたいなら海外ブランドのスタンダードノートに注目しよう。CPUやストレージ容量などの基本性能に着目すると、国内ブランドメーカーよりコスパの良い製品が多い。例えば、予算が10万円前後の場合、国内ブランドだとCPUの性能が低く、メモリーやストレージ容量の小さい製品が古い型落ちしか選べない。だが、海外ブランドなら実用的なパソコンを選ぶことができる。

その一例がデルの「Inspiron 16 5645」とHPの「Pavilion 16-af (インテル)」だ(図1)。どちらもトレンドの16型ノートながら、CPUは前者がAMDのRyzen 5。後者がAI処理用のNPUを搭載したインテルのCore Ultra 5だ。メモリーは16GB、ストレージは512GBのSSDとなる。

予算を15万円に上げれば、さらに高性能なスタンダードノートが選べる(図2)。例えば、マイクロソフトが提唱する「Copilot+ PC」の基準を満たしたレノボの「ThinkBook 16 Gen 7」。CPUには、Snapdragon X Plusを採用する。もう一つは、ASUSの「Vivobook 16」。CPUには、通常電力版の第13世代Core i9を搭載するなど驚きの高性能だ。

キー配列が独特だったり、購入してから届くまで時間がかかったりするが、コスパ重視なら見逃せない。

軽量で見やすい！14型で重さ634gの製品も

「軽さ」と「バッテリー駆動時間」の両にらみで

パソコンを頻繁に持ち歩くなら、モバイルノートパソコン（以下、モバイルノート）を選びたい。性能は必要最低限だが、軽量で小さく薄いので持ち運びが楽だ。また、低消費電力のパーツを採用しながらバッテリー容量が大きいので、駆動時間はかなり長い。電源を確保できない外出先でも、長時間使用できる（図1）。

パソコンを外出先などで持ち歩く人に適しているのはもちろん、家の中で頻繁に場所を移動して使う人にも向く。衝撃や落下に強い構造を持つ製品が多いのも特徴の1つだ（図2）。

昨今、メーカー各社はこの分野に注力しており選択肢は多い。軽さにこだわるなら、重さわずか634gの富士通の「FMV Zero」が第一候補に

なる。出先での駆動時間が気になる人にはNECの「LAVIE SOL」がお勧め。コスト重視なら、HPの「Pavilion Aero 13-bg」が視野に入る（図3）。紹介した製品の価格はいずれも最小構成の場合で、メモリやSSDの容量を増やすと20万円を超える。それでも、長い目で見ると容量に余裕を持たせたほうが後悔しなく

て済みそうだ。

A4サイズは使い勝手が良いサイズは必ず確認する

13・3型や14型のモバイルノートは、A4判の大きさに近く本誌とほぼ同サイズだ（図4）。両者は画面サイズが異なるだけで本体の大きさはほぼ同じ。製品によっては、13・3型のほうが大きいこともある。これは「型」や「インチ」が画面の対角線の長さを示すもので、本体の大きさを表すものではないから

モバイルノートはこんな人に最適



モバイルノートとは…

- ~14型 (A4サイズ程度)
- 薄い
- 重さ1kg前後
- 性能は必要最低限
- バッテリーの駆動時間が長い

図1 画面サイズが14型以下で、重さ1kg程度の軽くて薄いパソコンは「モバイルノートパソコン」(以下、モバイルノート)のカテゴリーに分類できる。性能は必要最低限でバッテリーの駆動時間が長い製品が多い

● 頻繁に持ち歩く人にお勧め



図2 小さくて軽いため、外出先などで頻繁にパソコンを持ち歩く人に向く。書斎や居間など自宅の中で移動する際にも便利。製品の特性上、衝撃や落下に強いものも多い

● お勧めのモバイルノートはこれだ！

FMV Zero (WU5/J3) ● 富士通

直販価格: 19万5500円~

画面サイズ	CPU
14型	Core Ultra 5 125U
メモリ	ストレージ
8GB	PCIe SSD 256GB

重さが634g!



LAVIE SOL (PC-GE17763A1)

● NEC

直販価格: 19万7450円~

画面サイズ	CPU
13.3型	Core i7 -1355U
メモリ	ストレージ
16GB	PCIe SSD 256GB

バッテリーが持つ!



Pavilion Aero 13-bg

スタンダードモデル ● HP

直販価格: 17万6000円~

画面サイズ	CPU
13.3型	Ryzen 5 8640U
メモリ	ストレージ
16GB	PCIe SSD 512GB

コスパが良い!



図3 富士通の「FMV Zero (WU5/J3)」は、最軽量モデルの重さが634gと圧倒的に軽いのが特徴。NECの「LAVIE SOL」は、バッテリーの実際の駆動時間が約14時間と長い。HPの「Pavilion Aero 13-bg」はコスパが良い

持ち運びに影響大! 「軽さ」に注目



指2本で持ち上げられる軽さ

図7 軽いと持ち運びは楽になる。できれば1.2kg以下の製品を選びたい。このクラスで最も軽いのは富士通のFMV Zero (WU5/J3)で、最軽量モデルはたった634gしかない

●素材を厳選して軽さを追求

素材や内部基板、部品の形状などを工夫して軽量化

+FCL独自の軽量化産業(0.1g単位)

- 液晶パネル
- ヒートパイプを4mm短縮
- クリック中継ボード面積を43%削減
- 保護シート面積を40%削減
- バッテリー
- パームレストカバー

634gの実現に向けて、各部品を徹底的に軽量化

図8 本体素材に軽量で剛性のある炭素繊維(カーボン)やマグネシウムを採用し、内部部品のサイズや面積を極力抑えて軽さを追求している(出所:富士通のFMV Zeroのプレゼンテーション資料より抜粋)

●軽さだけが正義ではない

	WU5/J3 ウルトラライトモデル	WU4/J3 ハイパフォーマンスモデル
14.0型ワイド	約634g~約639g	約888g
世界最軽量	カーボンファイバーボディ	EVO準拠の高性能
軽い分バッテリーが小さい	動画再生時:約6.0時間 アイドル時:約15.0時間	バックライト付キーボード 動画再生時:約11.5時間 アイドル時:約30.0時間

図9 長時間の動作を求めるなら、重さだけでなくバッテリーの駆動時間も確認したい。重さはある程度犠牲にしてバッテリーを増量している製品もあるからだ。画面はFMV Zeroの仕様

13.3型や14型は本誌とほぼ同サイズ

A4判用紙(横210×縦297mm)

一般的な13.3型や14型のモバイルノート

幅290~315mm

奥行き205~215mm

本誌(横210×縦280mm)

図4 13.3型や14型のモバイルノートは、A4判用紙(横210×縦297mm)や本誌(横210×縦280mm)とほぼ同サイズとなる

●14型と13.3型は差がほぼない

LAVIE SOL(13.3型) FMV Zero(14型)

幅301.6mm 幅308.8mm

奥行き210mm 奥行き209mm

ほぼ同じ大きさ

図5 ノートパソコンの大きさの目安となる「~型」「~インチ」は、画面の対角線の長さ。そのため、14型と13.3型のサイズは、差が数mm程度しかなく、パソコン本体の大きさはほぼ同じ

●14型以下はかばんを選ばない

BM-BSSDBK

●エレコム

実売価格:2700円程度

図6 ほとんどのビジネス用バッグは、A4判用紙が入る大きさになっている。そのようなかばんは、例外なく14型以下のモバイルノートを収納できる

14型以下(A4サイズ)はほとんどのビジネスバッグに入る

だ。型に惑わされず、本体の大きさを確認して製品を選びたい(図5)。

モバイルノートは持ち歩く際に、収納するかばんを選ばないのも助かる。ほとんどのかばんは、A4判用紙が入る大きさに合わせて作られている。15型や16型が入るかばんは限られるため、外出先に持ち運ぶなら、かばんに入れやすい14型以下がベストだ(図6)。

**軽さだけが正義ではない
バッテリーとのバランスも重要**

本体は少しでも軽いほうが持ち運びは楽になる。実際の移動を考えると重さは1.2kg程度が限界だろう。その意味で富士通のFMV Zeroの軽さは驚異的。重さ634gの最軽量モデルは、指2本でつまみ上げられる(図7)。必要な強度を確保しながら軽量な素材を使い、内部部品を小さくして軽さを追求したという(図8)。

ただし、極限まで軽さを追求すれば、当然バッテリーも小さくなる。例えば、FMV Zeroで重さ888gの別モデルを選べば、仕様上のバッテリー駆動時間は634gのモデルの倍近くまで延びる(図9)。外出先でも電源を確保できる場所で主に使うなら軽さ最優先で構わない。しかし、電源を確保できない場所での利用が多いなら、軽さとバッテリーのバランスが重要になる。モバイルノートは、軽さだけが正義ではない。活用シーンに合わせた選択をしたい。

特集
パソコン選びの新潮流

画面比率や解像度、パネルの種類、表面処理などに着目



図1 画面の縦横比率は16対9が主流だが、最近は16対10のパソコンも多い。16対9のフルHD(1920×1080ドット)が、16対10のWUXGA(1920×1200ドット)になると、縦方向に120ドット分も情報量が増え、ウェブページや文書が見やすい。さらに縦に長い3対2のパソコンもある

●画面の光沢と非光沢は一長一短

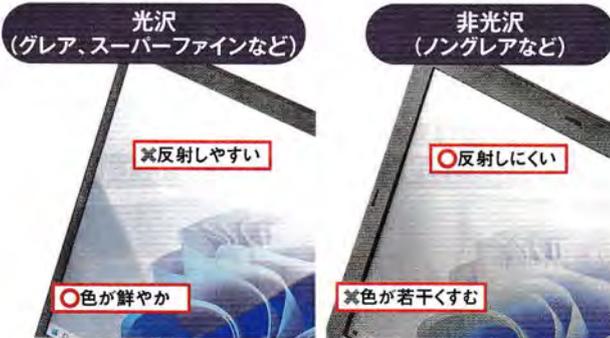


図4 画面の表面処理も注目点の1つ。光沢だと色が鮮やかに見えるが反射しやすい。非光沢だと反射しにくい、色は若干くすむ。写真や動画の閲覧が主なら前者、文字や数字を見るのがメインなら後者を選びたい

●楽に操作したいならタッチパネルが便利



図5 タッチパネル機能を備えたモバイルノートなら、画面に直接触ってスマホのように操作できる。スマホ流の操作を好む人には重要ポイントだ

●高解像度画面はきれいだが電池の持ちが悪い

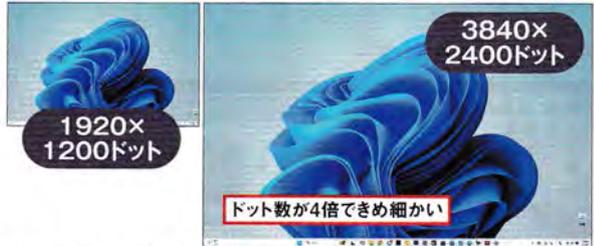


図2 2.7Kや4Kなど高解像度ディスプレイを搭載するモバイルノートもある。画面は高精細できれいだが、フルHDやWUXGAの画面と比べるとバッテリーの消費が激しいので注意

●液晶と有機ELはどっちがいい?



図3 IPS方式の液晶は、色合いが良く低消費電力で動作するうえに価格も安い。有機ELは、色合いと省エネ性能の両面でIPS方式より優れているが、価格が高い。予算に余裕があれば有機ELを選びたい

画面表面の光沢と非光沢は好みの分かれるところ。光沢は色が鮮やかに見えるが反射がきつい。非光沢は反射を抑えられるが色が若干くすむ。国内メーカーは光沢、海外メーカーは非光沢のパネルを採用する傾向がある(図4)。また、楽に操作したい人はタッチパネル搭載を選びたい(図5)。

タッチパッドはホームポジションからの距離、面積を確認する。ホームポジションから位置が大きく離れていると操作しにくい。面積が大きいと手の位置にかかわらず操作しやすい(図6)。

画面パネルは、液晶(IPS)と有機ELがある。有機ELのほうが色合いが良く低電力で動作するため優れているが価格が高い。できれば有機ELを選びたいが、液晶でも問題ないため価格差を見て判断する(図3)。

と昔前のモバイルノートには画面が小さくキーボードが打ちにくい製品が多かったが、最近はそのイメージが払拭されつつある。例えば、ディスプレイの縦横比率は、横16対縦10や横3対縦2の製品が増えてきた。一般的な横16対縦9より縦に1~2割画面が広がるので、表示領域が増えて作業しやすくなる(図1)。なかには高解像度画面を持つモバイルノートもある。きれいな画面を表示できる半面、バッテリーの持ちは悪くなる。14型以下の画面サイズだと、画面を凝視しないと違いがわからないので、画質を重視する以外で選ぶ理由はない(図2)。

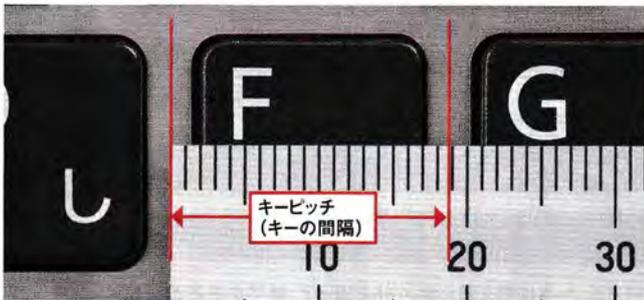
●かな印字なしでも日本語は入力できる



かな刻印がなくすっきりとしたデザイン

図9 一部の製品はデザインを優先し、キートップにかな印字がない。それでも、ローマ字入力による日本語入力は可能。かな入力でなければ、使い勝手に支障はほぼない

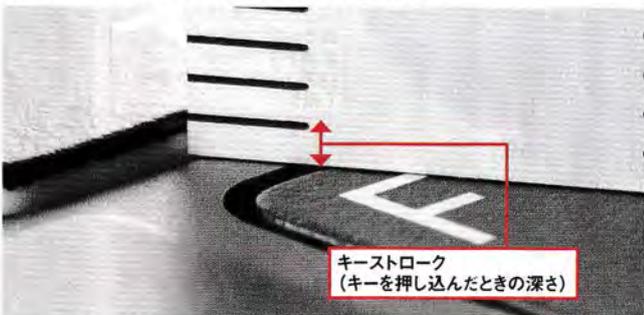
●打ちやすさを優先するならキーピッチを重視



キーピッチ
(キーの間隔)

図10 キーピッチはキーの間隔を表す。モバイルノートでもデスクトップパソコンのキーボードと同じ19mmを確保した製品が多い。一部の製品は、キー間隔が狭いこともある

●キーストロークで押し心地が変わる



キーストローク
(キーを押し込んだときの深さ)

図11 キーストロークは、キーを押ししたときの深さだ。キーストロークが深いほど、キーの打ち心地は良くなる傾向にある

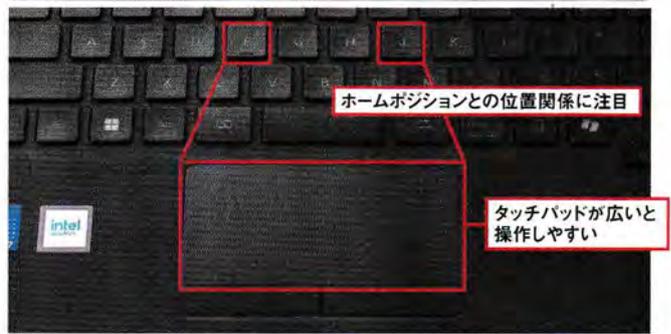
●暗い場所でものをいうバックライト



キーボードのバックライトがあれば暗い場所で便利

図12 夜間の航空機内など、暗い場所で使うならキーボードのバックライトも重視。モバイルノートの中にはこの機能を備えていない機種もある

タッチパッドやキーボードも重要



ホームポジションとの位置関係に注目

タッチパッドが広いと操作しやすい

図6 ホームポジション（「F」キーと「J」キーの位置）とタッチパッドの位置関係を確認する。距離が近いとタッチパッドを操作しやすい。また、タッチパッドの面積が広いと、指がどこにあっても楽に操作できる

●キーボードの配列を必ず確認



「Enter」キー周辺の記号キーや「End」「Home」などのキーの位置

「Esc」キーや左「Ctrl」キーの位置

スペースの広さ

図7 「Esc」「半角／全角」「Ctrl」などのキーや、右側の記号キーなどは、パソコンによって配置が異なるので必ず確認する。また、スペースキーもなるべく広い製品を選びたい。これらは使い勝手に大きく影響する

●海外メーカー製のキー配列に要注意

日本語入力で多用するファンクションキーを物理キーとして搭載しない機種も



デル「XPS 14」

デザイン優先でキー配列が犠牲に

図8 海外メーカー製のモバイルノートは、デザイン重視でキー配列が大幅に異なることがある。特に、日本語入力で多用するファンクションキーの有無には気を付けたい

キー配列は、左右の特殊キーや記号キーなどの配置や大きさを確認する（図7）。海外メーカー製の場合、ファンクションキーですら物理キーが省かれていることもあるので要注意（図8）。一部の製品ではキートップにかなの刻印がないが、ローマ字入力による日本語入力は問題なくできる（図9）。キーの間隔を示すキーピッチや、キーの深さを示すキーストロークも重要。最近ではモバイルノートも十分なキーピッチを確保したものが多く、入力しやすくなっている（図10、図11）。夜間の航空機など暗い場所で使うならバックライトの有無も確認したい。機能を備えていない機種もある（図12）。

特集
パソコン選びの新潮流

●USB PD対応なら小型充電器に置き換えも



図4 USB PD 端子を備えたモバイルノートなら、付属のACアダプターを他社の小型充電器に置き換えることも可能。その際、付属のACアダプターの最大電力以上を出力できる小型充電器を選ぶ。それをスマホの充電にも使用できる

●緊急時にモバイルバッテリーで充電



図5 PD対応のモバイルバッテリーからモバイルノートを充電することも可能。外出先でバッテリーが切れても慌てずに済む。この場合も、パソコンに付属するACアダプターの最大電力以上を供給できるモバイルバッテリーを選ぶ

生体認証があると手間が省ける



図6 指紋認証や顔認証などの装備も確認する。これらの機能を備えていると、利用開始時のサインインでパスワードやPINを入力する手間を省ける

USBは「充電」と「映像出力」への対応が必須



図1 モバイルノートの端子類をチェックする際は、USBの拡張規格に着目したい。充電対応の「USB PD」[注1]と映像出力対応の「DP Alt」[注2]は今や必須のインタフェースだ

●端子の数や種類は必ず確認

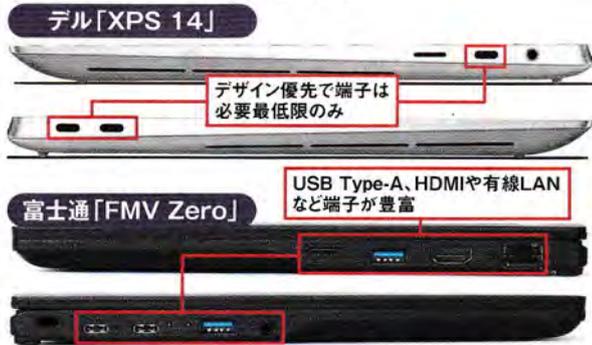


図2 モバイルノートは据え置き型ノートと違って、端子を必要最低限しか持たない製品も多い。自分が必要とする端子が十分な個数あるか、必ず仕様や製品写真を確認する

●端子が少なくても実は問題なし



図3 DP Altに対応するUSB Type-C端子なら、変換アダプターを用意すれば映像出力端子として利用できる。また、USBハブや小型ドッキングステーションなどを用意すれば、足りない端子を補える

**PD対応は外出先で便利
セキュリティ対策も重視**

外出先でパソコンを使うなら、USB PD対応は欠かせない。これはUSB端子の充電規格。同規格に対応したパソコンの場合、付属のACアダプターの最大電力以上を出力できるものなら、他社の小型充電器で代替できる。付属のACアダプターより大幅に小型化できるので外出時の荷物を減らせる(図4)。また、USB PD対応のモバイルバッテリーからの充電も可能だ。外出先でバッテリーが切れても、モバイルバッテリーがあれば急場をしのぐことができる(図5)。

モ バイールノートを選ぶとき、端子の種類や数はもちろん、USB端子が「USB PD」[注1]や「DP Alt」[注2]などの拡張規格に対応するか確認したい(図1)。

本体側面の端子の種類や数は、製品によって大きく異なる。特にデザイン重視の製品では、必要最低限の端子しか持たないものも多い。仕様や製品写真に目を通し、端子の種類や数をよく確認したい(図2)。USB Type-C端子は、対応する拡張規格がポイント。USB PD対応なら充電端子を、DP Alt対応なら映像出力端子を兼ねる。また、変換アダプターを使えばType-C端子をType-A端子に変換することも可能。Type-Cしかなくても実は問題ない(図3)。

[注1]USB Power Deliveryの略。USBの拡張規格で最大240Wの電力を供給できる
[注2]DisplayPort Alternate Modeの略。USB Type-Cケーブルのデータ信号線を用いて、DisplayPort規格の映像通信をする機能

さらに小さいB5サイズ(12型クラス)もあり



Let's note SR
(CF-SR4FDNCR)
●パナソニック

直販価格:28万9300円~



VAIO SX12
(VJS1268) ●VAIO

直販価格:21万7800円~

図10 パナソニックの「Let's note SR」シリーズやVAIOの「SX12」シリーズのように、B5サイズ(12型クラス)でさらに小型のモバイルノートも少数だがある

特集

パソコン選びの新潮流

低価格モバイルノートも選択肢が豊富



Lenovo V14 Gen 4
AMD ●レノボ

直販価格:6万7980円~

画面サイズ	CPU
14型	Ryzen 3 7330U
メモリー	ストレージ
8GB	PCIe SSD 256GB

mouse B4-I1U01PG-B
●マウスコンピューター

直販価格:6万9800円~

画面サイズ	CPU
14型	N100
メモリー	ストレージ
8GB	PCIe SSD 128GB



図11 10万円以下の低価格帯の14型モバイルノートも選択肢が豊富。ウェブ閲覧や文書作成など通常の作業をするなら十分な性能だ。ただし、高価格帯の製品に比べると若干重い

ちなみに、A4サイズのモバイルノートよりひと回り小さい、12型クラスでB5サイズの製品もある。ただし、A4サイズより若干高価だ(図10)。このほかA4サイズには低価格帯の製品もある。安価な製品は重いことがあるので、必ず重さをチェックする(図11)。

選ぶのが理想だ(図9)。

間を明記している製品もあるので、仕様か実測かを正しく判別したい(図7)。利用状況に応じてスリープと休止状態を自動で切り替えるなどバッテリーを長持ちさせる独自機能を持つ製品もある(図8)。また、長い年月にわたってモバイルノートを使い続けたいのなら、バッテリーを自分で交換できる機種を選ぶのが理想だ(図9)。

バッテリーの駆動時間をチェック

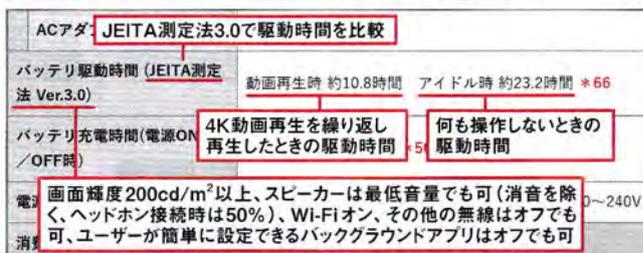


図7 バッテリーの駆動時間を表すJEITA測定法 Ver. 3.0は、4K動画再生時とアイドル時の駆動時間を表記するもの。ほかのパソコンと横並びで比較できる。ただし、実際の駆動時間ではないことに注意

●バッテリーを長持ちさせる独自機能に注目

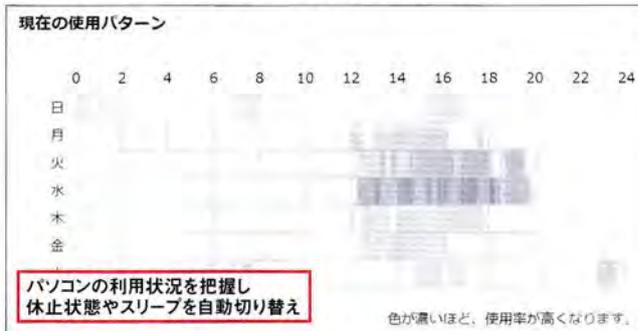


図8 パソコンのユーティリティアプリには使用状況に応じて、休止状態やスリープを切り替えてバッテリーの持ちを良くする独自機能を備えるものもある。画面はレノボの「Lenovo Vantage」の「スマート・スタンバイ」機能

●長く使うならバッテリーを交換できる機種がおすすめ



図9 バッテリーは充電回数で500~1000回、使用期間で3~5年程度で劣化するといわれている。できるだけ長く使いたいなら、自分でバッテリーを交換できる製品を選ぶとよい。その分、寿命は長くなる

外出先でモバイルノートを使うのであれば、紛失や盗難による情報漏洩のリスクを避けるために、ロックもしっかりとかけておきたい。指紋認証や顔認証といった生体認証があれば、パスワードやPINの入力を省けるし安全性も高い。必ず欲しい装備だ(図6)。

仕様上のバッテリー駆動時間は横並びで製品比較する際の目安

バッテリー駆動時間も注視しよう。現在、バッテリーの駆動時間は「JEITAバッテリー動作時間測定法(Ver.3.0)」に沿って各社が表記している。動画再生時とアイドル時の駆動時間で、実際の駆動時間はそれより短くなるが、ほかの製品と駆動時間を比較するときの目安となる。なかには実際の駆動時間を明記している製品もあるので、仕様か実測かを正しく判別したい(図7)。

タッチ操作が超便利！パソコンとタブレットの1台2役

パソコン用途がメインなら「コンバーチブル型」

コンバーチブル型



図1 通常時は一般にクラムシェル型と呼ばれるノートパソコン。ヒンジを軸に360度回転してタブレットに変形するタイプをコンバーチブル型と呼ぶ。キーボードを使った入力作業が多ければこちらが向く。写真はレノボの「Idea Pad 5x 2-in-1 Gen 9」

テントモード



図2 キーボードを背面に回転して自立させた形態を「テントモード」と呼ぶ。動画視聴などに向くモードで設置スペースが小さくて済む。キーボードは使えないのでタッチで操作する。写真はHPの「Envy x360 16-ac」

スタンドモード



図3 キーボードを底面に回した状態を「スタンドモード」という。設置面積はテントモードより必要だが安定感がある。写真はデルの「Inspiron 14 2-in-1 7440」

デタッチャブル型



図4 キーボード部分を本体から取り外せるタイプをデタッチャブル型やセパレート型と呼ぶ。タブレットとしての用途がメインならこちらがおすすめだ（写真はマイクロソフトの「Surface Pro」）。コンバーチブル型と比べると選択肢はやや少ない



図5 デタッチャブル型は自立させるために、背面にキックスタンドを設けている機種もある。Surface Proでは無段階で角度調整が可能だ



図6 一般的にデタッチャブル型のキーボードは、専用の端子で本体と接続する。この機種はマグネットで簡単に着脱できるようになっている【注】

変形機構は2通り
主流はコンバーチブル型

2 in 1 をタブレットに変形させる機構は2種類ある。1つは、ヒンジを軸に液晶を360度回転させる「コンバーチブル型」(図1)。キーボードと画面の角度を自由に調整できるため「テントモード」や「スタンドモード」と呼ばれる置き方も可能だ(図2、図3)。

もう1つは、キーボード部分を着脱して使う「デタッチャブル型」(図4)。タブレット使用時に自立するように、背面にキックスタンドを内蔵する製品もある(図5)。キーボードは一般的に専用端子を備え、接続を認識したり本体から給電したりできる(図6)。現状ではコンバーチブル型のほうがデタッチャブル型より選択肢は豊富だが、どちらが快適かは用途次第。文字入力が多いならコンバーチブル型が便利。タブレットとして活用する機会が多ければデタッチャブル型をお勧めしたい。

【注】Bluetooth接続で取り外し時にも使えるキーボードもある

12万円切りでペン付きのCopilot+ PCも登場

Copilot+ PC対応で11万円台



IdeaPad 5x 2-in-1 Gen 9

●レノボ

直販価格:11万9790円

画面サイズ	CPU	メモリー	ストレージ
14型(有機EL)	Snapdragon X Plus X1P-42100	16GB	512GB

図1 Snapdragon X Plus (8コア)を搭載したCopilot+ PC対応のコンバーチブル型。12万円を切りながら、メモリー16GB、ストレージ512GB、有機EL、Wi-Fi 7対応と基本スペックも充実。ペンも標準で付属

9万円台のインテル搭載モデル



Inspiron 14 2-in-1 7440

●デル

直販価格:9万1791円～

画面サイズ	CPU	メモリー	ストレージ
14型(液晶)	Core 5 120U	8GB	512GB

図2 9万円台のコンバーチブル型。ブルーライトを抑えるDell ComfortView搭載。CPUやメモリーを強化した上位スペックモデルも用意。このほかAMD製CPUを搭載した「7445」もある。ペンは別売

10万円台のAMD搭載モデル



Yoga 7 2-in-1 Gen 9 14型 (AMD)

●レノボ

直販価格:10万7690円～

画面サイズ	CPU	メモリー	ストレージ
14型(液晶)	Ryzen 5 8640HS	8GB	512GB

図3 10万円台でAMDのRyzen 8000シリーズを採用したコンバーチブル型。画面は14型液晶。Wi-Fi 6Eに対応。ペンは標準で付属する。インテル製CPUを搭載した別シリーズもある

特集 パソコン選びの新潮流

メモリーは16GBが普及

製品	メモリー	規格
IdeaPad 5x 2-in-1 Gen 9	16GB	LPDDR5X
Inspiron 14 2-in-1 7440	8GB	DDR5
Yoga 7 2-in-1 Gen 9 14型 (AMD)	8GB	LPDDR5X
Envy x360 16-ac スタンダードモデル	16GB	LPDDR5
LIFEBOOK WU3/J3	8GB	LPDDR5
Surface Pro (第11世代)	16GB	LPDDR5X

図6 お買い得クラス(上の3つ)のメモリーは8GBが多いが、実力派クラス(下の3つ)では16GBが中心。Copilot+ PC対応機は動作要件の16GBを搭載している

ストレージは512GBが中心

製品	SSD	規格
IdeaPad 5x 2-in-1 Gen 9	512GB	PCIe
Inspiron 14 2-in-1 7440	512GB	PCIe
Yoga 7 2-in-1 Gen 9 14型 (AMD)	512GB	PCIe
Envy x360 16-ac スタンダードモデル	512GB	PCIe
LIFEBOOK WU3/J3	256GB	PCIe
Surface Pro (第11世代)	256GB	PCIe

図7 ストレージは全モデルがSSDを採用し、9万〜11万円台のクラスでも容量は512GB。ただ15万円以上では256GBの製品もある

CPUはエントリーからミドルクラス

CPUメーカー	CPU	NPU(性能)
9万〜11万円台のお買い得モデル		
クアルコム	Snapdragon X Plus (8コア)	○(45TOPS)
インテル	Core 5 120U	—
AMD	Ryzen 5 8640HS	○(16TOPS)
15万円以上の実力派モデル		
クアルコム	Snapdragon X Plus (10コア)	○(45TOPS)
インテル	Core i5-1335U	—
インテル	Core Ultra 5 125U	○(非公表)

図4 本パートで取り上げた6製品はシリーズ中最廉価のスペック。CPUはインテルやAMD、クアルコム製のエントリーからミドルクラスが採用されている(36ページ参照)

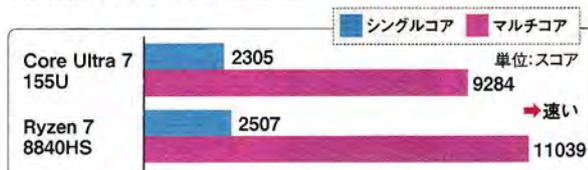


図5 2in1は機種によってはインテルCPU搭載とAMD CPU搭載の2種類のモデルがある。参考までに上位スペック機が搭載するCPU同士をベンチマークアプリ「Geekbench 6」で比較。シングルコア、マルチコアともにスコアはAMDがインテルをやや上回った

心臓部のCPU(SoC)は、定番のインテルとAMDに加え、クアルコムにも注目。Copilot+ PCの要件を満たす廉価なCPUとしてクアルコムの「Snapdragon X Plus」シリーズを採用したモデルが登場している(図4)。また、同型モデルでCPUをインテル製とAMD製から選択できる機種もある。参考までに上位スペック機のCPUの性能を比較すると、AMDがやや優勢(図5)。価格や基本スペックが同等ならAMDのほうがコスパは高いといえる。

メモリー容量は一部8GB搭載モデルもあるが16GBが増えている(図6)。特にCopilot+ PCは16GB以上が必要要件なので必ずクリアして

クアルコム製CPUが登場
メモリー容量は16GB

リエーションに富む2in1の中で、今回は9万〜11万円台のお買い得クラスと15万円以上の実力派クラス(25ページ参照)をそれぞれ3モデルずつピックアップした。

前者のお買い得クラスでは、画面サイズが14型の製品ラインアップが充実(図1〜図3)。実際の製品スペックを交えながらトレンドを見ていこう。なお、本パートで選定したモデルは価格重視で選んだもの。大半の機種ではCPUやメモリー、画面方式などを強化した上位スペックモデルが用意されている。

PD充電で専用アダプターいらす



図11 6モデルともUSB PDに対応するので、市販のUSB PD対応充電器を使ってUSB Type-C経由で充電が可能。専用の電源アダプターを持ち歩かなくて済むのは楽だ

ペン付属モデルがお得

メーカー	対応ペン	付属	プロトコル	電源
レノボ	Lenovo デジタルペン	○	—	電池 (単6)
デル	Dellアクティブペン PN5122W [注]	× (7980円)	AES	電池 (単6)
HP	HPリチャージャブル MPP2.0アクティブペン	○	MPP	充電式
富士通	専用アクティブペン	○	AES	充電式
マイクロソフト	Surfaceスリムペン	× (2万2770円)	MPP	充電式

図12 6モデルが対応するアクティブペン。製品によって付属または別売に分かれる。電源は電池式と充電式の2種類。電池はいわゆる単6形なので入手性にやや難がある。マイクロソフトの「Surfaceスリムペン」は触覚フィードバック機能によって紙に書く感覚を再現。なお、プロトコルが公開されている製品は他社の互換品が使える場合がある



Cocreator

図13 ペンは指よりも精細に書けるので手書きノートやお絵描きには必須。特にCopilot+ PCの「Cocreator (ココリエーター)」ではペン入力が生かせる (39ページ参照)

電はほぼ常識。汎用のUSB充電器が使えるのが便利だ (図11)。付属のアクティブペンの有無は製品によって分かれ、ペンを検知する方式も製品ごとに異なる (図12)。ノートを手書きしたり、イラストを描画したりするにはペンが欠かせない。また、Copilot+ PCはペン入力を生かしたAI機能も売り。「Cocreator (ココリエーター)」を使いこなしたいならペンがあると便利だ (図13)。

有機ELのほうが鮮やか



図8 低価格クラスでは液晶方式が大半。有機ELは上位スペック機が中心だが、IdeaPad 5x 2-in-1 Gen 9のように11万円台でも有機EL採用モデルもある。一般に液晶に比べて発色の鮮やかさがメリット。写真や動画を楽しみたいなら重視したい

持ち歩くなら重さも重視

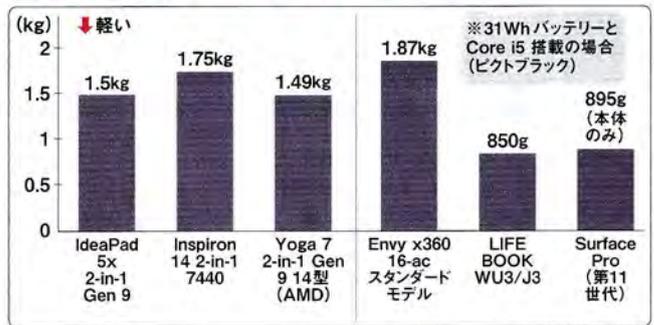


図9 14型モデルは1.5k~1.8kg程度。モバイルとしては重量級なので毎日持ち歩くには向かない。一方、上位クラスには軽量モデルもラインアップ。特にLIFEBOOK WU3/J3は850gで2in1としては軽い

バッテリー駆動時間は10時間以上が大半



図10 バッテリー駆動時間はおおむね10時間以上。計測条件はメーカーによって異なる。レノボと富士通はJEITA3.0による動画再生時、デルとHPはベンチマークアプリ、マイクロソフトは独自の条件で計測した数値だ。富士通は軽量バッテリー搭載時で、大容量バッテリーも選択できる

14型は持ち歩きの負担 ペンは付属しない製品も

14型はサイズ的には十分に持ち歩けるものの重さがネック。お買い得クラスでは1.5kg~1.8kgと日常的に持ち歩くには少々厳しい (図9)。バッテリー駆動時間は一部機種を除いて動画再生時で10時間以上 (図10)。機種によって測定条件が異なるため参考値となるが、駆動時間はおおむね十分だ。

2in1ではUSB PDによる充電はほぼ常識。汎用のUSB充電器が使えるのが便利だ (図11)。付属のアクティブペンの有無は製品によって分かれ、ペンを検知する方式も製品ごとに異なる (図12)。ノートを手書きしたり、イラストを描画したりするにはペンが欠かせない。また、Copilot+ PCはペン入力を生かしたAI機能も売り。「Cocreator (ココリエーター)」を使いこなしたいならペンがあると便利だ (図13)。

[注]基本的なペン機能は動作するが周辺機器管理アプリ「Dell Peripheral Manager」の一部機能には非対応

15万円超なら軽量機や大画面モデルも選択肢

15万円以上なら個性派が粒ぞろい

16型の大画面コンバーチブル型



Envy x360 16-ac

スタンダードモデル ●HP

直販価格: 15万9800円~

画面サイズ	CPU	メモリー	ストレージ
16型(液晶)	Core Ultra 5 125U	16GB	512GB

図1 16型のコンバーチブル型。劇場のような音という「Poly Studioデュアルスピーカー」を内蔵。ペンは標準で付属。CPUやメモリー、有機ELなどスペックを強化した「パフォーマンスモデル」もある

800g台の超軽量13.3型



LIFEBOOK WU3/J3

●富士通

直販価格: 18万4600円~

画面サイズ	CPU	メモリー	ストレージ
13.3型(液晶)	Core i5-1335U	8GB	256GB

図2 重さ850gの軽量コンバーチブル型。バッテリー駆動時間は5.3時間(いずれも31Whバッテリーの場合)。ペンは標準で付属。ウェブ直販専用で、CPUやメモリー、ストレージ、バッテリーなどをカスタマイズ可能

2in1を代表するデタッチャブル型



Surface Pro(第11世代)

●マイクロソフト

直販価格: 19万1180円~

画面サイズ	CPU	メモリー	ストレージ
13型(液晶)	Snapdragon X Plus (10コア)	16GB	256GB

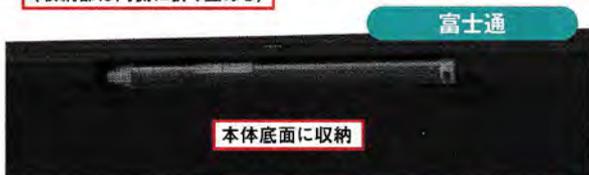
図3 Copilot+ PCにいち早く対応。画面比率は3対2(2880×1920)。Office Home & Business 2021が付属。キーボードとペンは別売。「Surface Pro キーボード」の直販価格は2万4090円

特集 パソコン選びの新潮流

ペン収納の工夫が光る



キーボード上部に収納(収納部は内側に折り畳める)



本体底面に収納

図6 実力派クラスは本体やキーボードにペンを収納・吸着できるので紛失しにくい。マイクロソフトの「Surface Pro キーボード」(別売)は上部にペンの収納スペースが設けられている(上)。LIFEBOOK WU3/J3は底面にペンを収納可能(中)。HPでは右側面にマグネットで吸着(下)。HPを除いて自動でペンが充電される



本体側面に吸着

16型もラインアップ

製品	サイズ	解像度	方式
IdeaPad 5x 2-in-1 Gen 9	14	1920×1200	有機EL
Inspiron 14 2-in-1 7440	14	1920×1200	液晶
Yoga 7 2-in-1 Gen 9 14型(AMD)	14	1920×1200	液晶
Envy x360 16-ac スタンダードモデル	16	1920×1200	液晶
LIFEBOOK WU3/J3	13.3	1920×1080	液晶
Surface Pro(第11世代)	13	2880×1920	液晶

図4 解像度はフルHD(1920×1080ドット)以上が標準。縦横比は16対9と16対10、3対2の3パターン。後者にいくほど縦方向の情報を多く表示できる。Yoga 7 2-in-1 Gen 9 14型(AMD)やEnvy x360 16-ac、Surface Proには有機EL搭載モデルもある



図5 画面サイズは14型前後が主流だが、16型の大画面モデルもHPやレノボから発売。HPの16型は1.9kg近いので(前ページ図9参照)、自宅で移動しながら自由なスタイルで利用するのに向く[注]

前出のお買い得モデルとの明確な差は、ペンの収納と充電方法だ。ペンは単体で持ち歩くと紛失しやすく、いざ使いたいときに電池切れというケースも少なくない。実力派モデルはいずれも本体やキーボードに収納・吸着できるように工夫されている(図6)。電源は3機種とも充電式。収納と同時に充電される機種なら、電池切れの心配も少ない。

2in1の主な画面サイズは13〜16型と幅広い(図4)。特に実力派モデルの13型や13.3型は軽量で外に積極的に持ち出すモバイルユーザー向き。16型は基本的に家庭内で据え置いて使うユーザーに向いている。画面の縦横比は16対9や16対10が中心だが、Surface Proのように3対2の縦長の機種もある(図5)。ウェブ閲覧や文書作成などで縦方向に情報量を多く表示できるのがメリットだ。

画面サイズは多彩 ペン収納と充電に差

2 in 1は15万円を超えると選択肢の幅が格段に広がる。画面が大きく見やすい16型モデル、800g台の超軽量モデル、Copilot+ PCの代名詞のデタッチャブル型といった実力派ぞろいだ(図1〜図3)。CPUやメモリー、ストレージなどの基本スペックのトレンドは前ページまでで解説した通り。それ以外の特筆すべき点を見ていこう。

[注] 写真は有機ELモデル。本パートで取り上げた製品の上位スペックで画面方式や解像度が異なる機種がある

10万円ノートと同等の製品が5万円で手に入る

圧倒的高コスパ、ただしサポート面に不安あり

ミニPCと呼ばれる小型デスクトップが注目を集めている(図1)。過去にスティックPCなどの小型パソコンが注目を集めたが、処理性能が低く数年で市場からほぼ消えた。今回のミニPCはそれとは一線を画すも

の。小型パソコンは遅いというイメージを払拭し、メイン機として使える性能を備える。従来のデスクトップとは異なる独自の存在感を放っている。第一の特徴は、サイズが小さく置き場所に困らないこと。VESAという

規格に対応していれば、ディスプレイの裏面に取り付けることもできる。2つめは、コスパが抜群に良いこと。例えば、10万円のノートパソコンと同じCPUを搭載したミニPCが、5万円前後で購入できる。20万円のノート

パソコンと同じCPUを採用したミニPCなら10万円程度で入手できる。これなら、ディスプレイと一緒に購入してもお釣りがくるほどだ。

SSDやメモリーの増設・交換も簡単だ。本体の上蓋を外せば、容易に空きスロットを見つけることができ、迷うことなく作業できる。

ただし、ミニPCの製造元は新興の中国メーカーが多く、アフターサービスやサポート面には不安がある。トラブルがあっても自力で解決できるだけの知識を持った上級ユーザー向けの製品カテゴリーといえる。

手のひらに載る大きさでもスペックはノートに匹敵

ミニPCのサイズは1辺15cm以下が一般的だ(図2)。重さは500g以下が大半で、モバイルパソコンよりも軽い。バッグに入れて出先に持ち運ぶのも苦にならない。

完成品のほかにベアボーンもある(図3、図4)。ベアボーンはケースにマザーボードと電源のみが取り付けられた半完成品で、一部パーツを別に購入して後付けする。ミニPCのベアボーンはCPUを搭載し、メモリーとストレージ、OSがないのが一般的だ。

製造しているのは一般には知られていないメーカーが多い。業界を牽引し

ここ数年で一気に市場が拡大

ノートパソコンよりコンパクトで省スペース

ノートパソコンより価格が安いのにスペックが高い



VESA対応ならディスプレイに取り付け可能

ストレージやメモリーを交換可能

図1 最近ではミニPCがパソコン市場をにぎわしている。最大の特徴はノートパソコンと同等のスペックのパソコンが格安で手に入ることだ。サイズが小さく置き場所にも困らない。メモリーやストレージを交換・増設してスペックを強化できるモデルもある

手のひらに載るコンパクトサイズ



図2 ミニPCは小さいものだと1辺が10cm程度で、手のひらに載せられる。少し大きいモデルでも1辺が15cmを切る。重さは500g以下の機種も多く、バッグに入れて持ち歩いても苦にならない



手のひらに載るサイズ

ミドルクラスの製品がおすすめ

エントリークラス 【4万円未満】

予算2万円以下でもNシリーズなら買える

NucBox G3

●GMKtec

実売価格:1万8000円前後

CPU	メモリー	ストレージ
N100	8GB	256GB



メモリーとストレージが大容量でもこの安さ

EQ13

●Beelink

実売価格:3万5000円前後

CPU	メモリー	ストレージ
N200	16GB	500GB



図6 4万円未満のエントリークラスは、Celeronの後継である「Nシリーズ」のCPUを搭載するモデルが多い。3万円台だと16GBのメモリー、500GBのSSDを搭載するモデルもある

ミドルクラス 【4万~8万円以下】

10万円超のノートのスぺックが5万円台

UM760 Slim

●MINISFORUM

実売価格:5万6000円前後

CPU	メモリー	ストレージ
Ryzen 5 7640 HS	16GB	1TB



メモリーを24GB搭載し重いアプリの同時利用も快適

NucBox K3 Pro

●GMKtec

実売価格:6万円前後

CPU	メモリー	ストレージ
Core i7-12650H	24GB	1TB



図7 4万~8万円以下のミドルクラスは、手ごろながら高性能なモデルが充実している。搭載するCPUは、Core iシリーズやRyzenシリーズなどのノートパソコンと同じものだ。ノートパソコンの半額以下で買えることもある

ハイエンドクラス 【8万円超】

AI対応のCPUを搭載したフルスペックミニPC

UM790 Pro

●MINISFORUM

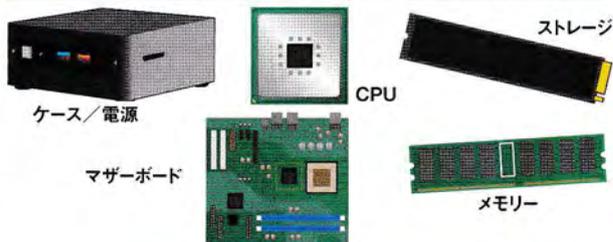
実売価格:9万3000円前後

CPU	メモリー	ストレージ
Ryzen 9 7940HS	32GB	1TB



図8 8万円超のハイエンドクラスは、最上位のCPUを搭載するモデルが主流で、それらはゲーミングPCに匹敵する性能がある。Ryzen 9 7940HSやCore UltraなどAI対応のCPUを搭載するモデルもある

完成品とベアボーンの2つのカテゴリ



	完成品	ベアボーン
ケース	○	○
マザーボード	○	○
電源	○	○
CPU	○	○
メモリー	○	×
ストレージ	○	×
Windows	○	×

図3 ミニPCは、すべてのパーツが組み込まれてWindowsがインストールされている完成品と、ケースとマザーボード、電源、CPUのみのベアボーンの2つのカテゴリがある。このパートでは完成品のモデルを紹介する

CPU: AMD Ryzen™ 9 8945HS

AMD Ryzen™ 9 8945HS

TYPE: ベアボーンキット(OSライセンスなし)

ベアボーンキット(OSライセンスなし)

これを選ぶとベアボーン

32GB RAM+1TB SSD | 11月30日に出荷予定

64GB RAM+1TB SSD

これを選ぶと完成品

図4 MINISFORUMの直販サイトでは、完成品とベアボーンの両方が販売されている。ミニPCのベアボーンはCPUを搭載し、メモリーとストレージ、OSが含まれないモデルが一般的だ

ほとんどの製品が中国の新興メーカー製

●中国の新興メーカー

ミニスフォーラム
MINISFORUM

ジーエムケーテック
GMKtec

ニポギ
NiPoGi

ビーリンク
Beelink

ツウウェイ
Chuji

ビーマックス
BMAX

ギコム
GEEKOM

マックスタン
Maxtang

●台湾のマザーボードメーカー

エイスス
ASUS

エムエスアイ
MSI

図5 ミニPCを製造する主要なメーカーをまとめた。多くは中国に本社を置く新興メーカーだ。ASUSやMSIなどのマザーボードメーカーもミニPCを製造しているが、中国メーカーに比べると割高だ

特集
パソコン選びの新潮流

同じCPUを搭載しているノートパソコンより断然安い

クラス	搭載CPU	メーカー	Pass Mark	ミニPCの価格例	ノートパソコンの価格帯
エントリー 4万円未満	N95	インテル	5369	2万円	3万5000円～
	N97	インテル	5757	2万円	7万円～
	N100	インテル	5489	2万円	3万5000円～
	N200	インテル	5091	3万5000円	6万5000円～
ミドル 4万～ 8万円以下	Ryzen 7 5700U	AMD	15838	3万7000円	10万円～
	Ryzen 7 5825U	AMD	18322	3万8000円	8万円～
	Core i7-1195G7	インテル	10730	5万円	10万円～
	Core i5-12450H	インテル	16984	4万7000円	9万円～
	Core i7-12650H	インテル	22520	6万円	12万円～
	Core i7-12700H	インテル	29384	6万円	16万円～
	Core i9-12900HK	インテル	27356	7万5000円	該当なし
	Core i7-13620H	インテル	24840	7万5000円	12万円～
	Ryzen 5 5600H	AMD	16959	4万3000円	8万円～
	Ryzen 5 5625U	AMD	14913	4万円	7万円～
	Ryzen 7 5800U	AMD	18391	4万2000円	10万円～
	Ryzen 7 5800H	AMD	21004	4万2000円	10万円～
	Ryzen 5 6600H	AMD	18705	4万5000円	15万円～
	Ryzen 5 7640HS	AMD	23042	5万6000円	11万円～
	Ryzen 7 PRO 6850H	AMD	23353	5万円	該当なし
	Ryzen 9 PRO 6950H	AMD	22978	6万8000円	該当なし
Ryzen 7 7840HS	AMD	28912	7万8000円	17万円～	
Ryzen 7 8745H	AMD	30448	7万4000円	該当なし	
ハイエンド 8万円超	Core i9-12900H	インテル	27901	9万8000円	16万円～
	Core i9-13900H	インテル	28682	10万5000円	14万円～
	Core Ultra 5 125H	インテル	22185	9万円	12万円～
	Core Ultra 7 155H	インテル	25158	11万円	15万円～
	Core Ultra 9 185H	インテル	29272	14万円	24万円～
	Ryzen 9 6900HX	AMD	24756	8万4000円	25万円～
	Ryzen 7 7735HS	AMD	23907	8万1000円	10万円～
	Ryzen 9 7940HS	AMD	30399	9万3000円	17万円～
Ryzen 7 8845HS	AMD	28852	8万5000円	12万円～	
Ryzen 9 8945HS	AMD	29826	10万円	25万円～	

図9 同じCPUを搭載した完成品のミニPCとノートパソコンの価格をクラス別で比較した。「PassMark」の数値はマルチスレッド処理の評価[注1]。いずれのクラスもミニPCのほうが安く、半額以下で買えることも多い。ミニPCと別売のディスプレイをセットで買ってはまだ割安だ

ストレージはM.2 SSDが必須

ストレージはM.2 SSDが必須。エントリークラスには低速のeMMCの場合があるので注意

内蔵メモリのスロットは1つか2つ。このモデルは1つ



M.2 SSDの増設用のスロット

ストレージ

速い ↑ M.2 PCIe SSD
M.2 SATA SSD
遅い ↓ eMMC

メモリー (SO-DIMM)

速い ↑ DDR5 SDRAM
遅い ↓ DDR4 SDRAM

スロットが2つ
スロットが1つ

図10 ストレージはM.2形状のSSDなら読み書きが高速だ。低速なeMMC搭載モデルは避けよう。増設用の空きスロットがあることも多い。メモリーは主にノートパソコン用のSO-DIMMを搭載し、スロットはエントリークラスが1つ、ミドルクラス以上は2つ以上の場合が多い[注2]

[注1]「PassMark」はPassMark Softwareが提供するベンチマークテストで、図9は公式サイトで公開されている値(数値が大きいほど高性能)。なお、CPUの性能は、搭載したパソコンの性能や利用環境によっても変わる
[注2] マザーボードにしか付けられ、増設や交換ができない「LPDDR」のメモリーを搭載するモデルもある

ているのはMINISFORUMやMKtecなどの中国の新興メーカーだ(前ページ図5)。マザーボードメーカーもミニPCを製造しているが、中国メーカーに比べると割高だ。メーカーは各社ともにラインアップが豊富。ここでは価格帯ごとに分類し、4万円未満をエントリークラス、4万～8万円以下をミドルクラス、8万円超をハイエンドクラスとした。価格帯ごとの性能差は大きい。エントリークラスは、主にインテル

の「Nシリーズ」のCPUを搭載する(図6)。Nシリーズは省電力重視のEコアのみを搭載するCPUだ。PコアとEコアを両方搭載するCPUと比べると見劣りするが、11を快適に動作させるには十分な性能がある。ミドルクラスはインテルのCore iやAMDのRyzen 5/7などのCPUを搭載する(図7)。いずれもノート型の中上位機に搭載されるCPUで、性能は申し分ない。長く使うメ

イン機の買い替えを検討しているなら以下の性能差は大きい。長く使うメ

ミドルクラスが最有力だ。ハイエンドクラスの性能は桁違いだ。Core UltraシリーズやRyzen 9 7940HSなどのAI処理を得意とするCPUを搭載するモデルもある(図8)。

いずれのクラスもコストは高い。同じCPUを搭載するミニPCとノートパソコンとで価格を比較したのが図9だ。どのクラスでもミニPCのほうが圧倒的に安く、ノートパソコンの半額以下で買えることも多い。

メモリーとストレージは容量に注目(図10)。メモリーが16GB以上、SSDは512GB以上あれば快適に使える。注意したいのはストレージの種類。1万円台のミニPCは低速なeMMCを採用するモデルもある。ストレージの種類をよく確認して選ぼう。いずれのモデルも映像出力端子は複数あり、複数のディスプレイを併用できる(図11)。Type-CがUSB4に対応していれば、40Gbpsの外付けSSDを利用可能だ。

USBはType-Cの有無をチェック



映像出力端子の数

HDMIとDisplayPort、Type-Cで外部に映像出力ができる。端子を2つまたは3つ搭載する機種が多い

USB端子の速度性能

3.2 Gen 2 (10Gbps) 以上に対応した端子を搭載していれば、高速なポータブルSSDが使える (45ページ参照)

Type-C搭載の有無

PD対応のType-Cを搭載していれば、Type-Cから外部機器への給電、PD充電器からミニPCへの給電ができる

図11 ミニPCは映像出力端子が標準で2つあり、複数のディスプレイに映像出力ができる。USB端子はType-Cが3.2 Gen 2 (10Gbps) やUSB4 (40Gbps) に対応していれば、同規格のポータブルSSDの性能をフルに発揮できる。PD (USB Power Delivery) 対応のType-Cがあれば、外部機器に大電力を流したり、PD充電器から給電したりできる

Amazonはセールとクーポンを要チェック

購入店	取扱機種数	販売価格	購入前の確認	到着日
家電量販店	△ 限定される	△ ほかより高い	○ 店頭で確認	○ 早ければ即日
Amazon	○ 機種数が多い	○ ほぼ最安値	× 通販のみ	○ 早ければ即日
メーカー直販	△ 限定される	○ 最安値	× 通販のみ	× 遅い

Amazonで扱っているミニPCメーカー・ブランド
MINISFORUM、GMKtec、NiPoGi、Beelink、ACEMAGIC、TRIGKEY、BMAX、MINIXTEC、FUNYET、goodtico、origimagic、HiTabt、RINGREAT、SOYO、GEEKOM、AIOEXPC、KODLIX、CHUWI、AOOSTAR、SkyBarium など

図12 ミニPCを購入するときはAmazonがお勧めだ。取り扱うモデルが多く、価格も安い。Amazonからの発送なら最短即日で受け取ることも可能。メーカー直販も安い、海外サイトでの手続きが必要なため敷居が高く、手元に届くまで数日~2週間程度かかる

タイムセール

MINISFORUM UM680 Slim ミニpc Ryzen 7 6800H DDR5-4800MHz 16GB SSD Windows 11 Pro 小型pc Radeon グラフィック HDMI2.1 |DP1.4|USB 4K@60Hz トリプルディスプレイ出力 LAN/Wi-Fi6E/BT5.3 ミニパソコン

タイムセール
セール価格 -18% ¥55,563

クーポン

GMKtec (8C/16T 最大 4.50GHz) ミニPC 16GB 512GB Windows 11 Pro 3画面 2.5" WiFi6 Bluetooth5.2

¥52,879

チェックしてクーポンを適用

図13 Amazonでは、ミニPCのセールが常時行われており、メーカーの直販サイトとほぼ同等の価格で購入できる。セール対象でない場合でも、クーポンを取得すれば表示価格よりも安くなる

サポートはメールが基本、ボリュームライセンスに要注意

購入後のお問い合わせ>>
お問い合わせのみのみ、電話は不可

コマンドプロンプト
Microsoft Windows [Version 10.0.22621.1848]
(c) Microsoft Corporation. All rights reserved.
C:\Users\npc>slmgr/dli

① [slmgr/dli]と入力して Enter を押す

Windows Script Host
名前: Windows [R], Professional edition
説明: Windows [R], Operating System, OEM, DM channel
プロダクト キーの一部: WFG6P
ライセンスの状態: ライセンスされています

「VOLUME」と表示された場合は、購入先に確認する

② 「OEM…」と表示されれば問題ない

図14 中国メーカーのミニPCは、主要なパソコンメーカーに比べるとサポート面で劣る。問い合わせはサイトのフォームやメールのみで、英語でしか対応しないこともある (左)。OSのライセンスが企業向けのボリュームライセンスになっていることもあるので、購入後はコマンドプロンプトでライセンスを確認する (①②)

Amazonで買えばすぐ届く OSのライセンスは要確認
購入するときはAmazonを使うのがお勧めだ (図12、図13)。セールやクーポンを利用することで、メーカー

の直販サイトとほぼ同等の最安値で購入できる。直販サイトは届くまで1~2週間程度かかる場合があるが、Amazonからの発送であれば、注文してからすぐに自宅に届く。ミニPCメーカーのサポートは、国

内ブランドのメーカーに比べると明らかに劣る。問い合わせは原則メールやフォームのみで電話は不可 (図14)。何かトラブルが起きてから解決するまでに時間がかかる可能性が高い。OSライセンスの問題もある。企業

向けのボリュームライセンスがインストールされていた場合、ある日突然認証が外れてパソコンを使えなくなる心配もある。調べた結果がボリュームライセンスだった際は、メーカーまたは購入店に確認したほうがよい。

特集 パソコン選びの新潮流

国内と国外のブランドで機能に大きな差

テレビと兼用できるのが最大のメリット

タワー型のデスクトップを置くスペースはないが、大画面ディスプレイを使いたい。その希望をかなえてくれるのが一体型デスクトップだ。一体型は大画面でありながらも省

スペース設計。デスクにディスプレイとキーボードを設置するスペースがあればよい(図1)。一体型ならではの独自機能も魅力の一つ。テレビチューナーを搭載してい

るモデルなら、パソコンでテレビが見られる。映像入力用のHDMI端子を搭載し、外部ディスプレイとして使えるモデルもある。一体型デスクトップはその名の通り

デスクトップに分類されるが、タワー型とは似て非なる存在で、むしろノートパソコンとの共通点が多い。CPUやメモリーはノート用を搭載し、内蔵グラフィックスボードの追加も不可(図2)。タワー型はLANでネット接続するのに対し、一体型はWi-Fiを使って無線接続できる。つまり、ノート

一体型は普通のデスクトップと何が違う?



図1 一体型デスクトップは、液晶ディスプレイと同等のサイズで、タワー型のデスクトップよりも小さいスペースに設置できる。テレビと兼用したいという人もいるだろう。ここでは、一体型デスクトップを深掘りする

CPUやメモリーはノートパソコン用を採用



	タワー型デスクトップ	一体型デスクトップ	ノートパソコン
CPU	デスクトップ用	ノートパソコン用[注]	ノートパソコン用
メモリー	デスクトップ用	ノートパソコン用	ノートパソコン用
専用グラフィックス	マザーボードのPCIeスロットにじか挿し	マザーボードに組み込み(変更不可)	マザーボードに組み込み(変更不可)
外部ディスプレイ	別途必要	不要	不要
USB端子の数	多い	少ない	少ない
Wi-Fi	非搭載	搭載	搭載
キーボード	外付けタイプ	外付けタイプ	搭載
拡張性	高い	低い	低い

図2 タワー型デスクトップと一体型デスクトップ、ノートパソコンの特徴をまとめた。一体型は、ノートパソコン用のCPUやメモリーを搭載して、グラフィックス機能を内蔵し、標準でWi-Fiも使える。実質的にはノートパソコンと同等のスペックだ。タワー型デスクトップとの共通点は少ない

ディスプレイは23.8型と27型が主流

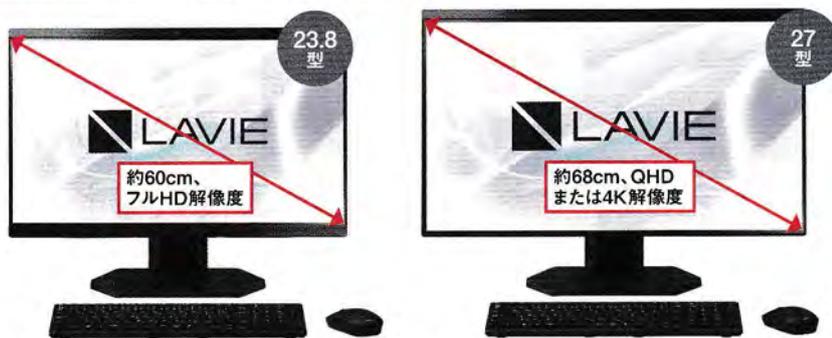


図3 現在販売されている一体型デスクトップは、23.8型と27型が主流だ。解像度は前者がフルHD(1920×1080ドット)で、後者がQHD(2560×1440ドット)と4K(3840×2160ドット)がある

[注]一部のハイエンドモデルでは、デスクトップ用のCPUを搭載する

ポイントはテレビ機能の有無



図4 一体型デスクトップを選ぶときの大きなポイントはテレビ機能の有無だ。国内での販売が中心のNECや富士通は、アンテナの入力端子を搭載するモデルがある(左)。グローバルで展開するレノボやデルのモデルはアンテナの入力端子を搭載しないほか、一部のカスタマイズを除き、DVDなどの光学ドライブを搭載しない。HDMIなどの映像入力端子を搭載していれば、外部ディスプレイとしても使える(右)

の性能のパソコンを大画面化したのが一体型だといえる。
モデル選択のキはテレビを見る？ 見ない？
現行モデルはディスプレイサイズが23・8型か27型の2種類にほぼ限られる(図3)。前者はフルHD解像度にと

どまるが、後者はより高解像度のQH Dや4Kが一般的。画質の鮮明さを重視するなら高解像度モデルを選びたい。テレビチューナーの有無は製造メーカーでほぼ決まる。国内での販売が中心のNECと富士通は、一部モデルで搭載(図4)。それらは本体背面にテレビ接続用の入力端子がある。グローバ

ル展開するレノボやデルの一体型は、チューナー搭載の現行モデルが存在しない。テレビを見たい場合は選択肢から外れる。
本体価格はチューナーの有無を問わずノートより割高だ。図5はCPUやメモリ、ストレージなどが同じ一体型とノートパソコンの価格比較だ。N

ECは一体型のほうが約9万円高い。処理性能のみで選ぶならノートのほうが安い。一体型を選ぶ決め手となるのは大画面とテレビチューナーの有無に集約される。大画面でテレビを見たければNECか富士通のモデル、テレビ機能が不要ならデルかレノボのモデルを選ぶといいだろう(図6)。

価格はノートよりもかなり割高

<p>LAVIE Direct A23 ●NEC 直販価格: 25万5750円</p>	<p>CPU: Core i7-1355U メモリー: 16GB ストレージ: M.2 SSD (1TB) 光学ドライブ: 搭載 Officeアプリ: なし</p> <p>一体型のほうが約9万円高い</p>	<p>LAVIE Direct N15 Slim ●NEC 直販価格: 16万5660円</p>
<p>IdeaCentre AIO 27IRH9 ●レノボ 直販価格: 11万3190円</p>	<p>CPU: Core i5-13420H メモリー: 16GB ストレージ: M.2 SSD (512GB) 光学ドライブ: 非搭載 Officeアプリ: なし</p> <p>一体型のほうが2万円弱高い</p>	<p>Lenovo V14 Gen 4 ●レノボ 直販価格: 9万6380円</p>

図5 CPUとメモリー、ストレージが同等のスペックの一体型デスクトップとノートパソコンの価格を比較した。NECは一体型のほうが約9万円高く、レノボは2万円弱高かった

欲しいのは一体型、それともノート？



図6 一体型を選ぶときは、テレビ機能の有無を条件にすると選択しやすい。大画面で見たいならテレビ機能がある27型を選ぼう。テレビ機能が必要ないならグローバルモデルを選んだほうが割安

特集
パソコン選びの新潮流

圧倒的に高性能！ゲームや動画編集で威力を発揮

用途によって性能評価の着眼点が異なる

グラフィックスボード（以下、グラフィックス）を搭載するタワー型デスクトップパソコン（以下、タワー型デスクトップ）は、負荷のかかるゲームや、写真・動画編集などのクリエイティブ作業に向く。グラフィックスはゲームの3D描画以外にも、AI（人工知能）の画像生成や画像のノイズ除去などさまざまな場面で威力を発揮

する。また、タワー型デスクトップは拡張スロットや各種端子を豊富に備えるので、部品の追加や交換によって長期間使用することもできる（図1）。

タワー型デスクトップは、値段と性能が比例し、高価な製品ほど性能も高い。安価な製品は15万円程度で購入できるが、高価な製品は100万円程度もする。お薦めは、CPUやグラフィッ

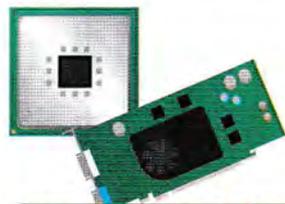
クスに求められる基本性能を備えた30万円前後の製品だ（図2）。

タワー型デスクトップの製品選びは、用途が決まる。ゲームやAIの生成作業などを中心にするならCPUよりグラフィックスの性能が重要になる。写真や動画の編集が中心なら、グラフィックスよりCPUの性能を重視したい（図3）。

近年はゲーミングパソコンも増えている。本体がLEDで派手に光る、内部のパーツが見えるといった特徴があるものが多いが、内部のパーツ構成は写真や動画編集などクリエイティブ向けパソコンと同じだ。もちろんゲーム以外の用途にも使える（図4）。

グラフィックスには、ゲーム以外にも幅広い用途がある。画像編集のノイズ除去やフィルターの適用、動画編集のプレビュー画面の生成や動画のエンコードなど、一部のクリエイティブな

タワー型デスクトップはこんな人に最適



とにかく性能を求める人



写真編集や動画編集がメインの人



ゲームを高画質で楽しみたい人



AIで生成したい人



部品の入れ替えで長く使いたい人

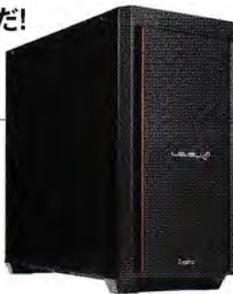
図1 タワー型デスクトップは高性能な製品が多い。ゲームや動画編集など負荷のかかる作業に向く。また、グラフィックスボード（以下、グラフィックス）を搭載するパソコンは、特定の作業を高速化できる。部品の追加や入れ替えも可能で長い期間利用できる

●お薦めのタワー型デスクトップはこれだ！

iiyama PC LEVEL-R7B6-LCR98D-UTX ●ユニットコム

直販価格:36万4800円～

CPU	グラフィックス	メモリー	ストレージ
Ryzen 7 9800X3D	GeForce RTX 4070 TI SUPER	32GB	1TB



DAIV FX-I7G60 ●マウスコンピューター (FXI7G60B7ADCW103DEC)

直販価格:26万4800円～

CPU	グラフィックス	メモリー	ストレージ
Core i7-14700F	GeForce RTX 4060	16GB	1TB



GALLERIA RM7C-R46-C ●ドスパラ

直販価格:19万4980円～

CPU	グラフィックス	メモリー	ストレージ
Core i7-14700F	GeForce RTX 4060	16GB	1TB



図2 「iiyama PC LEVEL-R7B6-LCR98D-UTX」は、CPUとグラフィックスの性能が高い。「DAIV FX-I7G60」と「GALLERIA RM7C-R46-C」はコスパに優れたクリエイティブ向けの製品。価格はいずれも最小構成時

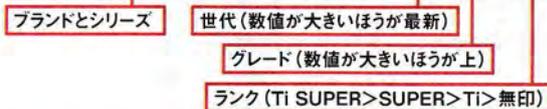
グラフィックスボードは型番と性能で見極める



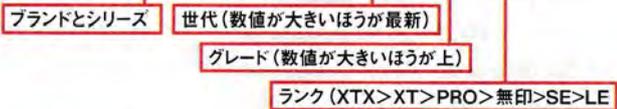
図7 現在、家庭向けパソコン用グラフィックスは、NVIDIAの「GeForce」シリーズ、AMDの「Radeon」シリーズ、インテルの「Arc」シリーズの3種類。グラフィックスは型番と性能で選ぶ

●グラフィックスの型番の読み方

NVIDIA GeForce RTX 4070 Ti



AMD Radeon RX 7900 XT



Intel Arc A750

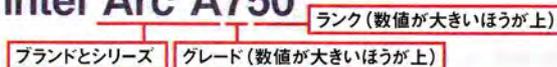


図8 各メーカーの型番の読み方をまとめた。世代が新しく、グレードが高いと性能は高い傾向にある（一部製品で例外あり）。同一グレード内でも性能別にランク付けされる製品もある。上位の「Arc B」シリーズも発表された

作業にも使われる。AIの生成作業にもグラフィックスを使う（図5）。グラフィックスの性能が高いと、これらの処理の速度が目に見えて向上する。特にノイズ除去や動画のエンコードなどの処理は、グラフィックスのほうがCPUより圧倒的に速い（図6）。

クリエイティブなら最低限ゲームなら妥協せず選ぶ

タワー型デスクトップが搭載するグラフィックスは、メーカーと型番、性能で見極める。現在、パソコン用グラフィックスを販売するのは、NVIDIA、AMD、インテルの3社（図7）。

各社製品の型番は世代、グレード、ラン

ゲームやAIはグラボ、動画編集はCPUに着目

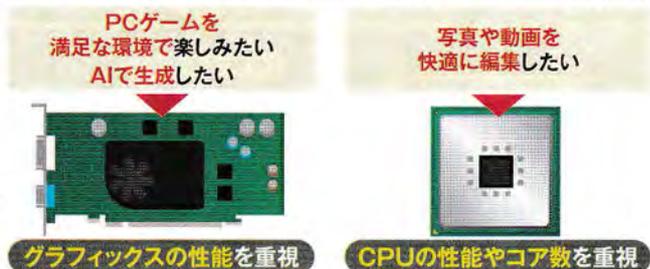


図3 PCゲームを楽しんだり、AIで生成したりするのが目的ならグラフィック性能を重視する。写真や動画を快適に編集したいのなら、CPUの性能やコア数に注目してパソコンを選ぶ

●ゲーミングパソコンは外観が派手で個性的なだけ



図4 ゲーミングパソコンの外観は、派手に光らせてたり内部を見えるようにしたりと個性的。しかし、クリエイティブ向けパソコンと使う部品はほぼ同じだ。もちろん、ゲーミングパソコンをゲーム以外の用途でも利用できる

●グラフィックスの利用範囲は広い



図5 グラフィックスの利用範囲は広く、ゲームの3D描画以外にも、写真や動画のノイズ除去、動画のエンコード、AIの画像生成などにも威力を発揮する。グラフィックスの性能が高いと、当然これらの処理も速い

●グラフィックス効果で作業時間を大幅短縮!

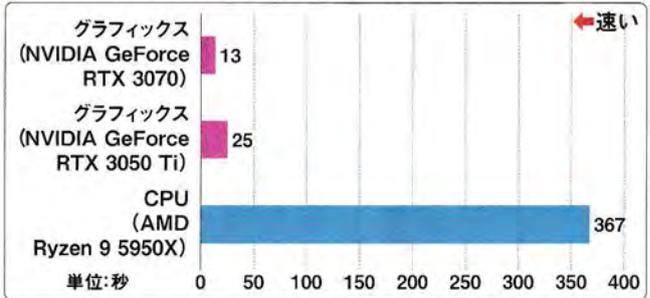


図6 「DxO PureRAW 4」(DxO)という画像編集アプリで、カメラで撮影した写真(RAWデータ)のノイズ除去を実行した。ハイエンドCPUで6分ほどかかる作業が、グラフィックスだと数十秒で完了する

特集 パソコン選びの新潮流

●PCゲームによって必要スペックが異なる



図10 お目当てのゲームがあるなら、そのゲームのシステム要件を調べる。「最低」ではなく「推奨」に沿ってパソコンを選ぶのがポイント。画面はSteamの「Microsoft Flight Simulator 2024」の販売ページ

●必要スペックはジャンルによっても違う



図11 ゲームのジャンルによっても必要スペックは違ってくる。シミュレーターやレースなどは、性能が高いグラフィックスが必須。RPG やストラテジー、レトロゲームなどは推奨スペックが低い

●滑らかな高画質動画でPCゲームを楽しめる



図12 高性能なグラフィックスだとゲーム画面は高精細に描画される。また、フレームレートが高いので滑らかにPCゲームが動く。高価な買い物になるが、存分にゲームを楽しみたいなら安易に妥協しないほうがよい

メモリー型デスクトップの数やM・2スロット

く(図12)。

特定のゲームを楽しむためにパソコンを買うのであれば、そのゲームの推奨環境以上のパソコンを選ぶ。そこを基準にすれば、CPUやグラフィックスを決めやすい(図10)。ゲームのジャンルで推奨環境がかなり異なるため、推奨環境の厳しいゲームに合わせてパソコンを選ぼう(図11)。「Microsoft Flight Simulator 2024」のような、リアルさや画質を売りにするゲームを動かすなら、一切妥協せずに高性能グラフィックスを搭載するパソコンを選ぶ。グラフィックス性能が高いパソコンだと、ゲームは高精細で描画され滑らかに動く(図12)。

●製品によりグラフィックス性能に大きな差

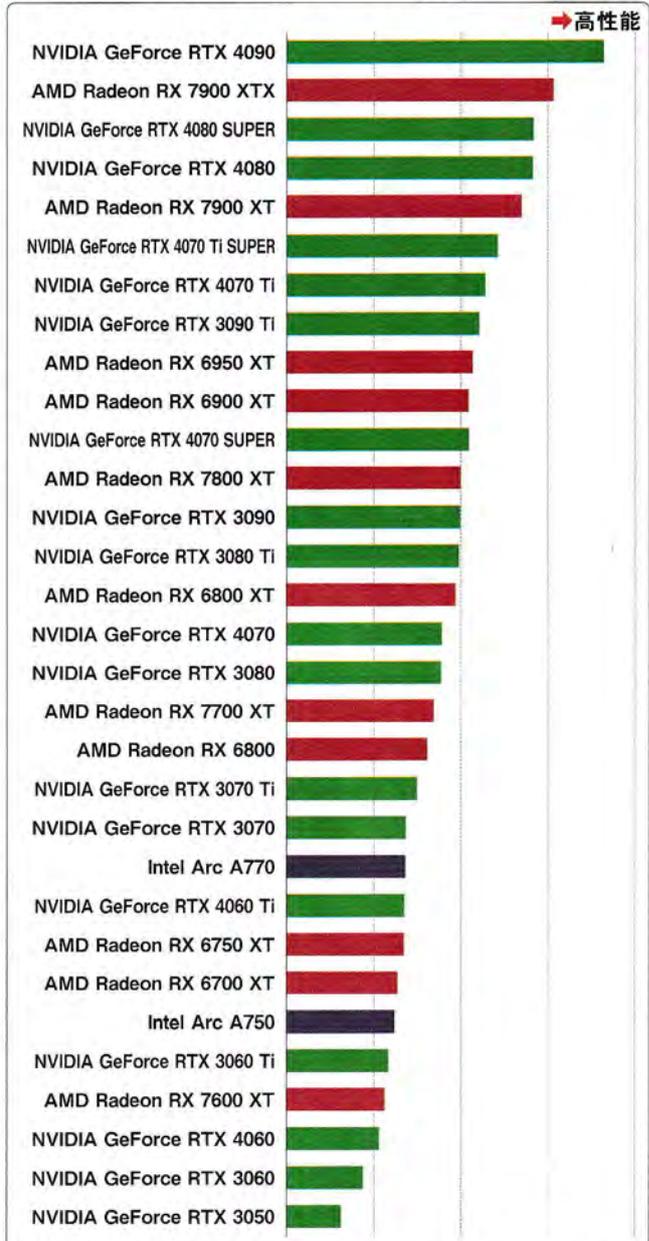


図9 ベンチマークアプリ「3DMark」(UL Solutions)の公開されている結果を基に、グラフィックスの性能を並べた。型番からは性能がわかりにくいので注意。なお、大まかに見ると性能と価格はほぼ比例関係にある

(図9)。

グラフィックスの性能と価格は、一部例外を除いて比例する。性能が高いグラフィックスを搭載する製品ほど、パソコンの価格は高い。クリエーティブ向けなら、安価で最低限の性能を持つ NVIDIA GeForce RTX 4060などを搭載するパソコンを選び、残った予算でCPUを重視するのが得策だ。ゲーム用途なら、予算が許す限りなるべく高性能のグラフィックスを搭載するパソコンを選びたい

構成次第では安く作れる「自作」も検討



図15 構成次第では、自作パソコンのほうが安上がりになる場合もある。ただし、組み立てる手間がかかるうえ、保証はパーツ単位になり、トラブル時にも自分で解決しなければならないので上級者向けといえる

●メーカーパソコンと自作パソコンどっちが安い？

	iiyama PC LEVEL-R7B6-LCR98D-UTX	自作パソコン	価格
CPU	Ryzen 7 9800X3D (AMD)	Ryzen 7 9800X3D (AMD)	8万6799円
マザーボード	PRO B650-S (MSI)	PRO B650-S WIFI (MSI)	1万9917円
グラフィックス	GeForce RTX 4070 Ti SUPER 16GB GDDR6X	GG-RTX4070TiSP-E16GB/EX/TP2 (玄人志向)	13万6980円
メモリー	32GB (16GB×2)	W4U3200CS-16G (16GB×2) (CFD販売)	6480円
ストレージ	1TB NVMe対応 M.2 SSD (PCIe 4.0×4)	980 PRO MZ-V8P1T0B/IT (SAMSUNG)	1万3480円
PCケース	ミドルタワー (ATX)	PURE BASE 500 Black BG034 (be quiet!)	1万980円
電源ユニット	750W 80PLUS BRONZE認証 ATX電源	KRPW-BK750W/85+ (玄人志向)	8973円
OS	Windows 11 Home (DSP版)	Windows 11 Home	1万7352円
合計	36万4800円		30万961円

図16 ハイエンド構成のゲーミングPC「iiyama PC LEVEL-R7B6-LCR98D-UTX」(ユニットコム)と、同等品のパーツを集め自作パソコンを組み立てる場合の価格を比較した。自作パソコンのほうが6万円以上も安いが手間はかかる

特集 パソコン選びの新潮流

拡張性やほかに必要なものを確認

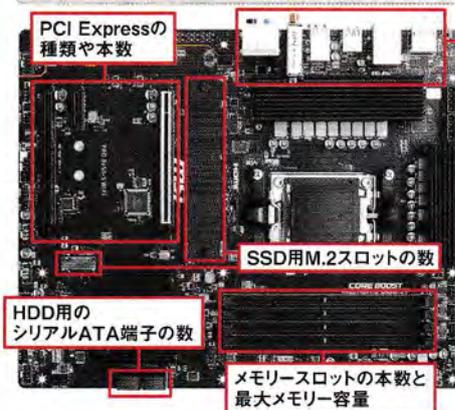


図13 メモリスロットの本数と最大容量、PCI Expressの種類や本数、M.2スロットやシリアルATA (SATA)端子の数、背面端子などの仕様を確認する。メモリーや拡張ボード、ストレージなどを追加できると将来のアップグレードが可能になる

●タワー型デスクトップに付属しないものは？



実売価格:3万4000円前後

図14 ディスプレイは付属しないので、別途用意する。また、パソコンによってはキーボードやマウスもない。端子さえ合えば、ほかのデスクトップパソコンからの流用も可能だ

安価に済ますなら「自作」も組み立て代行サービスもある

タワー型デスクトップの場合、自分の好みのパソコンを自作する手もある。組み立てに時間がかかるうえ、製品保証は原則部品単位だし、トラブルは自

と、SATA端子、拡張スロットの数なども必ず確認する。拡張性が高いと、パーツの交換や追加によって延命を図ることが出来る(図13)。なお、デスクトップではディスプレイが別売になる点に注意したい。製品によってはキーボードやマウスも付属しない。現在デスクトップを利用しているなら、つなぎ替えて流用する手もある(図14)。

携帯ゲーミングパソコンが人気



Claw A1M ●MSI

実売価格:9万円前後

ROG Ally ●ASUS

実売価格:10万円前後

図17 携帯ゲーム機型パソコンが各社から発売されている。内蔵グラフィックス性能が高いCPUを搭載し、ゲームも問題なく動作する。また、これらのOSはWindowsなので、ほかのアプリも動く

分で解決する必要があるなど面倒なことも多いが、パーツ構成によってはかなり安価で組み立てられる(図15、図16)。一部のパソコンショップでは、自作パソコンのパーツを自由に選べるショップブランドパソコンを販売したり、自作パソコンの組み立て代行サービスを提供している店舗もある。自作パソコンは欲しいが、自力で組み立てる自信がない人は積極的に活用したい。なお、ゲーム目的でパソコンを選ばず、携帯ゲーミングパソコンも選択肢の1つだ。デスクトップほどではないが、内蔵グラフィックス性能が高いCPUを搭載した製品が多く、数年前のゲームであれば快適に動く(図17)。

AI 処理に特化した「NPU」搭載モデルに脚光

現行のCPUはNPU内蔵の有無で大きく2つに分けられる



図1 現行のノートパソコン向けCPU（実際はCPUだけでなくチップセットやGPUなども内蔵した統合型プロセッサ）は、AI処理専用のNPU（Neural Processing Unit）を内蔵したものと内蔵していないものに大別できる

パソコンを選ぶ際、その心臓部であるCPUの性能を見定めることは極めて重要だ。今CPU選びで最も注目すべき点は、AI処理専用のプロセッサ「NPU」注の搭載の有無だ。現段階では内蔵したCPUはまだ

少数だが、今後内蔵したものが主流になることは間違いない（図1）。実際、各CPUメーカーの最新世代のCPUには、ほぼNPUが内蔵されている（図2）。ただし、AMDのRyzen 8000 / 7000 シリーズは

NPUを内蔵するものと非内蔵のものが混在しているので注意したい（図3）。現状NPUは必須ではないが、長期的視点で選ぶのもアリ。NPUがなければAI処理が行えない

わけではない。CPUやGPUでもAI処理は実行できる。ではなぜNPUを内蔵するCPUが増えているのか。その理由は図4の通りだ。NPUはAI処理に特化しており、各種AI処理を効率良く低消費電力で実行できるこ

●NPUを内蔵した主なCPU

インテル Core Ultra (シリーズ2) NPUの性能:最大46TOPS	Core Ultra 9 288V Core Ultra 7 268V Core Ultra 5 238Vなど
インテル Core Ultra (シリーズ1) NPUの性能:最大11TOPS	Core Ultra 9 185H Core Ultra 7 165H Core Ultra 5 135HLなど
AMD Ryzen AI 300シリーズ NPUの性能:最大55TOPS	Ryzen AI 9 HX 375 Ryzen AI 9 HX 370 Ryzen AI 9 365
AMD Ryzen 8000シリーズ NPUの性能:最大16TOPS	Ryzen 9 8945HS Ryzen 7 8845HS Ryzen 5 8645HSなど
AMD Ryzen 7000シリーズ NPUの性能:最大10TOPS ※右の製品のみNPUを搭載	Ryzen 9 7940HS Ryzen 7 7840HS Ryzen 7 7840U Ryzen 5 7640HS Ryzen 5 7640U
クアルコム Snapdragon X シリーズ NPUの性能:最大45TOPS	X1E-84-100 X1P-64-100など

図2 NPUを内蔵した現行のCPUは表の通り。Ryzen 7000シリーズは表に記載しているものだけがNPUを内蔵する。詳細は後述するが、NPUを内蔵したすべてのCPUがマイクロソフトのCopilot+ PCの要件を満たすわけではない

●NPUを内蔵しない主なCPU

インテル Core (シリーズ1)	Core 7 150U Core 5 120U Core 3 100Uなど
インテル 第14世代Core	Core i9-14900HX Core i7-14700HX Core i5-14500HXなど
インテル 第13世代Core	Core i9-13980HX Core i7-1370P Core i5-1350P Core i3-1315Uなど
インテル Intel Processor Nシリーズ	Intel Processor N200
AMD Ryzen 8000シリーズ	Ryzen 5 8540U Ryzen 3 8440Uなど
AMD Ryzen 7000シリーズ	Ryzen 9 7845HX Ryzen 7 7736Uなど

図3 インテルのCore (シリーズ1)と第14世代CoreまでのCPUはNPUを内蔵していない。CoreとNPUを内蔵するCore Ultraは間違いないので注意。Ultraと付くものがNPU内蔵と覚えておこう。AMDのRyzen 7000シリーズは図2の表に記載してあるもの以外はNPUを内蔵しない

[注] インテルのCPUは第14世代Core (Core i7、Core i5など)に続く新CPUからシリーズ名が変わり、「第15世代」といった世代表記と「i」の文字が使われなくなった。NPUを内蔵する新世代CPUはCore Ultra (Core Ultra 7、Core Ultra 5など)、NPUを内蔵せずに旧世代のアーキテクチャーを継承した新CPUは単にCore (Core 7、Core 5など)と呼ばれる

日常的に役立つAI機能が増えている

●処理の負荷に応じて消費電力を調整



図5 最近ではユーザーの使用状況に応じて、AIがCPUパワーやファンの回転数、画面の明るさなどを自動で調整して消費電力を下げる機能を搭載しているパソコンが多い

●セキュリティの強化



図6 画面の前を離れたら自動で画面をロックし、画面の前に戻ったらロックを解除する——これもセキュリティを強化するAI機能の1つ。ほかにものぞき見を検知したら知らせてくれる機能などがある

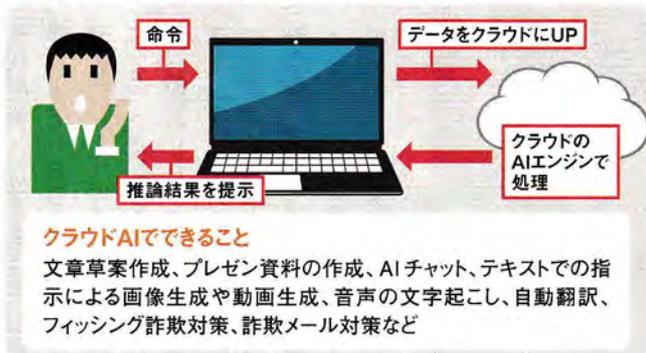
●ビデオ会議／授業を快適にする機能



図7 ビデオ会議アプリのノイズを除去して音声をクリアにする機能や、明るさを調整して顔の映りを良くするような機能も、AIにより実現している

NPU非内蔵CPUを選んでもOK

●NPUはまだ必須というわけではない



クラウドAIでできること

文章草案作成、プレゼン資料の作成、AIチャット、テキストでの指示による画像生成や動画生成、音声の文字起こし、自動翻訳、フィッシング詐欺対策、詐欺メール対策など

図8 NPUはパソコン上でAI処理を行うのに役立つもの。現状、AIチャットやAI画像生成アプリなどAIを活用するアプリの多くは、AI処理をクラウドのAIエンジンで処理している。そのため、NPUはまだ必須ではない

NPUを搭載するメリットとは？

●低消費電力でAI機能を快適に使える

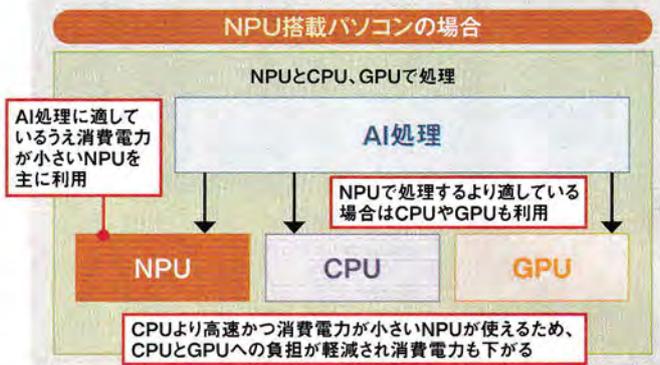
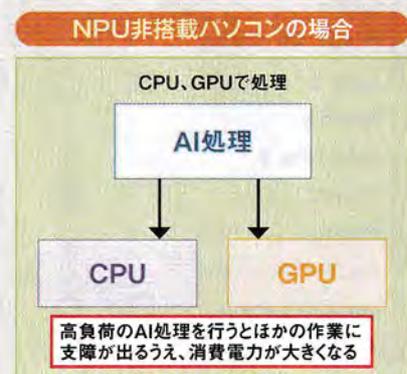


図4 NPUを搭載するパソコンでは、AI処理をCPUやGPUに負担をかけずに低消費電力で実行できる。NPUを搭載しないパソコンでもAI処理は行えるが、CPUとGPUでAI処理をするため、ほかの作業に影響が及び消費電力も増大する



とが特徴。パソコン上でAI処理をする場合、NPUの有無が全体のパフォーマンスに大きく影響する。AI活用という点、画像生成などのクリエイティブ用途を想起する人が多く、いかもしれないが、身近な活用シーンにもすでにAIは入り込んでいる(図5～図7)。今後、NPUの重要性はますます増していく。

しかし、今NPUを内蔵したCPUが必須かといえば、そうではない(図8)。現在、AIを活用するアプリは、クラウド上のAIエンジンを使って処理を実行するものが多い。そのようなアプリでは、せつかくのNPUも実力を発揮できない。まだNPUを搭載しな

いパソコンが多いなか、それらのアプリが急激にパソコン上でAI処理をする方向にシフトするとは考えにくい。また、現在パソコンに搭載されているAI機能は、CPUやGPUで処理してもほかのタスクに影響を与えないレベルのものが多く。現状、NPU内蔵CPUを搭載したパソコンはまだ高価なのであせって手を出す必要はない。

ただし、今後はプライバシーやセキュリティの問題からパソコン上でAI処理を行うアプリが増えることは確実だ。5～10年先を見越して長く快適に使えるパソコンが欲しいなら、今NPU内蔵CPUを搭載したパソコンを買っておいて損はないだろう。

特集
パソコン選びの新潮流

選択するCPUのグレードは使用目的で決まる！

C

PUを選択する際に重要なのは、パソコンの使用目的をはっきりさせること。例えば、Officeアプリの使用がメインなのに、高解像度動画の編集やCG作成などのハイエンド用途向けの高価なCPUを選択するのは、単に無駄な出費が増えるだけだ。

インテル、AMDのCPUともに、数字でグレード分けされている。この数字で適応する用途を大まかに判断できる(図1)。数字が付いていない製品はエントリーパソコン向けで、性能は最低限でよいという人に向く。これをきちんと把握して、自分の用途に合った

ものを選べば間違いはない。例えば、幅広い用途を想定し、なるべく低価格で汎用的なCPUがよいという人には、インテル、AMDのCPUともに「5」の数字が付くアップパーミドルの製品がおすすめ。なお、同グレードのCPUの場合は、

世代が新しいほど高性能。同世代の同グレードCPUの場合は、プロセッサナンバーが大きいほど高性能だ(図2)。ただし、インテルCPUの場合は、最新のCore Ultraシリーズと、それ以前のCore iシリーズとはプロセッサナンバーの表記が異なるので要注意。AMDも最新のRyzen AI 300シリーズとそれ

CPUのグレードを一発で見極める方法は？

CPUの種類とグレード		用途	メール、ウェブ閲覧	動画、音楽再生	Word、ExcelなどのOfficeアプリ	複数作業の処理	動画編集、高画質写真の編集	CG作成
9の数字が付くCPU	インテル製	Core Ultra 9 Core i9	○	○	○	○	○	○
	AMD製	Ryzen 9						
7の数字が付くCPU	インテル製	Core Ultra 7 Core i7	○	○	○	○	○	○
	AMD製	Ryzen 7						
5の数字が付くCPU	インテル製	Core Ultra 5 Core i5	○	○	○	○	○	△
	AMD製	Ryzen 5						
3の数字が付くCPU	インテル製	Core Ultra 3 Core i3	○	○	○	○	△	×
	AMD製	Ryzen 3						
そのほか	インテル製	Intel Processore N Pentium/Celeron	○	○	○	△	×	×
	AMD製	Athlon						

- 9の数字が付くCPU** = 最高クラスの性能のパソコンが欲しい人向け
- 7の数字が付くCPU** = 幅広い用途に対応する性能が欲しい人向け
- 5の数字が付くCPU** = 性能に加え、予算も重視したい人向け
- 3の数字が付くCPU** = ビジネスアプリが動けばよい人向け
- それ以外** = 予算最重視で性能は最低限でよい人向け

図1 CPUは自分の使用目的に合ったものを選ぶのが一番。インテル、AMDの主力製品は数字でランク分けされており、その数字でCPUのグレードを大まかに判断できる。これを参考に自分の用途に適したCPUを選べばよい

同じグレードの製品はプロセッサナンバーで性能の優劣を判断



図2 同じグレードのCPUの性能の優劣はプロセッサナンバーで判断できる。数字が大きいほど世代が新しく高性能。末尾のアルファベットはカテゴリーを示しているが、その意味は世代で異なる。詳細はメーカーのウェブサイトなどで確認できる